

# マジシャンズストーリー



加藤英夫 著

当書は "マジシャンズストーリー" ですが、それはマジシャンの歩みを紹介するものでもあり、マジシャンの考え方をお伝えするものでもあり、ときには笑い話のようなものも挿入し、そして胸にぐっとくるような話をお聞かせすることもあります。

素敵なマジシャンになるには、ただ素敵なマジックを学んでマスターするだけでなく、人々に演じて見せて、良好な結果を得られるようなマジックの利用の仕方が望まれます。

当書には、マジシャンの心の栄養となり、頭の栄養となる話をまとめました。お楽しみいただきながらお読みいただくと同時に、心と頭の中に染みこませていただければ幸いです。

---

◆◆◆

石田天海の演技レビュー  
= カール・フレミング、雑誌“Genii”、1936年10月 =

---

◆◆◆

石田天海の演技報告は少ないので、この記事は貴重なものです。(加藤)

9月19日に、ロスアンゼルスのおーフィアム劇場で、夕方から始まったマチネーショーを見てきました。6人のボードビル芸人が出演しましたが、天海夫妻はスターとして最終演技者として演じました。

天海の演技の背景は、天海自らが制作した、赤縁の紫のサテン幕をフルステージセットイングとしたものでした。舞台中央に置かれたドレープがかけられたテーブルの上には、木の枝をかたどったものが置かれています。タバコ受けとしては三脚の上に置かれたボウルがセットされています。天海は紫サテンの日本の着物、おきぬは赤と緑と白のオーソドックスな和服、そして二人とも草履を履いています。

オープニングはおきぬの演技です。赤と紫の四角い紙を重ねて破り、またもとの紙に復活させて、その2枚を天海に渡します。天海はそれを破り、もとの紙に復活させるのではなく、ボールと花のついた髪飾りとして現し、それをおきぬに渡します。

それを受け取ったおきぬは、その中からタバコのバックとマッチを出現させます。天海は1本のマッチを取り出し、口にくわえます。そしてマッチ箱を空中に投げて、落ちてきた箱でマッチを点火させ、そしてタバコに火をつけます。

このあと天海はタバコと時計のプロダクションを繰り返します。火のついたタバコはボウルの中へ投げ込まれ、時計は木の枝に引っかけていきます。取り出した時計を長く伸ばして見せます。合計15本の火のついたタバコ、48個の時計が取り出されます。時計は通常の取り出し用時計の半分の薄さに作られているとのこと。出現の感じも従来のものよりスムーズです。

時計の木が埋め尽くされたあと、二人はテーブルの両側でバウを取り、それから二人で蝶の模様が描かれた90cmx240cmの布を広げて持ち、前に進みます。そして舞台の先端まで来たとき、布を勢いよくどけると、彼らの手にはそれぞれ巨大な金属製の時計が持たれています。直径は60cmぐらいあります。

演技に合わせてアレンジされた音楽が流され、クライマックスを盛り上げる役目をはたしていました。演技中はいっさいしゃべりません。全体で8分から8分半のアクトとしてまとめられています。

---

◆◆◆

## 雨後の竹の子

= ジョン・ブース、雑誌“Genii”、1936年11月 =

---

◆◆◆

長いマジックの歴史の中で、今日、マジック界はひとつの深刻な事態に面しています。アメリカのどの州においても、雨後の竹の子のようなナイトクラブの出現によって、マジシャンの需要が急激に増えました。各地のマジシャンはそれぞれのテリトリーにおいて、独自のマジックを演じていればよかったです。しかし事情は激変しました。

地方に分散していたマジシャンたちが、ナイトクラブからナイトクラブをまわり、ナイトクラブ向きのマジックというのがそれほど開発されていなかったため、演目が陳腐化してしまっただけです。そこでカーディニのコピーがいたる州に現れました。カードやタバコを出すマジシャンだらけになってしまったのです。カーディニの輝くようなマジックが、いっぺんに平凡なマジックになってしまいました。これは現代のマジック界における危機であります。

そのような変化の中で、トークの上手なマジシャンは、ナイトクラブでのマジックの分野で、リーダーとなる可能性があります。ラッセル・スワン、ハワード・ブルックス、ポール・ロッシーニなどは、無言のアクトの限界がないために、生き残るでしょう。とは言っても、長い目で見れば、パントマイムアクトも新しいものが生まれて生き残っていくに違いありません。

カーディニの演技の全体のコピーではなくても、彼の演技の部分部分が多くのマジシャンに使われていることによっても、カーディニの価値が下がってしまいました。彼の価値は彼の演技のスタイルによって守られているはずですが、そのスタイルすら真似するマジシャンが、本物の値段の半分以下で買えるという事態になっているのです。

---

## ロイ・ウォルトン物語

= ポール・スウィンフォード、雑誌“Linking Ring”、1980年11月 =

---

“Phoenix” #188 の中に、'A B C' というカードマジックが書かれています。これは同誌 #12 のル・ブレントの同名マジックの、即席バージョンです。そのバリエーションは、1949年10月の時点で17歳であった、青年によって投稿されたものです。彼の名前は、ロイ・ウォルトン。そのカードマジックこそ、ウォルトンが世に初めて発表した作品でした。

“Devil's Plaything” の中で、ウォルトンはつぎのように述べています。「私がマジックに興味を持ったのは、10歳のときでした。初めて4年後には、私の興味はひとつのことに集中していきました。それはカードマジックです」。

ウォルトンが初期に影響を受けたのは、ビリー・オコーナー、グレート・ライル、ダンテ、エドワード・ビクター、アリ・ベイなどでした。それからウォルトンのマジックは急速に進化をとげて、彼のマジックは、クリーンで、ストレートで、しっかりまとまったマジックの代表とも言えるものとなりました。

ウォルトンの 'Lesson in Larceny' は、“Pallbearer's Review” 第1巻9号に掲載されました。そのカードマジックが好評だったため、編集者のカール・ファルブズは、第2巻4号において、ウォルトン特集を行うことにしました。それからというもの、彼の多くの作品が、“Abracadabra”、“Gen”、“Pentagram”、“Swami”、“Epilogue”、“Genii”、“Ibidem”、“Pabular”などで発表されました。さらにそれらの作品の人氣が、“Pallbearere's Review” 第7巻11号における、彼の2回目の特集につながりました。そして何冊かの彼の著書も出版されました。“The Devil's Plaything”、“Cardboard Charade”、“Tale Twisters”、“Trigger”、“Card Script”などです。商品としては、'カードワープ' と 'カスケード' が有名です。

もうひとつ、別の話があります。昔々、ロンドンのコンピューター会社に働く、有能なコンピューター技師がいました。彼はたいへん優れたシステムアドバイザーでした。当時、発展著しいコンピューター業界で、彼の将来も明るいものでした。

ところがある日、彼は勇気のいる決断をしました。出世競争に別れを告げ、彼が本当にやりたいことに専念することにしたのです。彼は荷物をまとめ、家族とともにスコットランドに引っ越し、マジックショップのマネージャーとなったのです。彼の名の前は、もちろんロイ・ウォルトンです。時は1955年でした。そのマジックショップは、有名なダベンポートマジックショップのグラスゴウ支店でした。

因みに、彼がいたコンピューター会社の彼の後がまに座ったのが、何とアレックス・エルムズレイでした。その会社は、ウォルトンという逸材を失いましたが、同時にエルムズレイという逸材を手にしたのです。

---

## アードネスを求めて

＝ マーチン・ガードナー＋加藤、“The man Who Was Erdnase”、1991 年 ＝

---

1991年に発行された、“アードネスと名乗った男”(The Man Who Was Erdnase)は、アードネスの正体を探求する400ページにわたるノンフィクション書です。その本の広告の文章は、つぎのように衝撃的なものです。

この本は、2つの秘密を隠し続けた男の物語です。彼は、カードシャープであることと、殺人犯であることを隠すために、著書には偽名を用いました。多くのマジシャンの協力を得て、いくつかの犯罪を犯し、そしてカードマジックの本を残した男の正体にせまります。

この本の中核になるのは、1946年からアードネス探求の活動を始めた、マーチン・ガードナーの記録です。ガードナーはパズルの大家ですから、彼が最初に考えたのは、アードネスのペンネームがアナグラムではないかということです。

多くのマジシャンが、本名を逆に綴ったものを芸名として用いてきました。“Amreh”というマジシャンの本名は、Herman Weber でしたし、“Savler”というマジシャンの本名は、Eduardo Relvas でした。そしてガードナーは、“S.E. Erdnase”を逆に綴ると、E.S. Andrews になることを見つけました。

ガードナーのつぎの着眼点は、“エキスパートアットザカードテーブル”のイラストレーター名として、“M.D. Smith”という名前があったことです。彼は、その名前のイラストレーターを調べ、見事に本人を見つけました。当時スミスは70歳を過ぎていたので、記憶ははっきりしていませんが、著者がアンドリュースであることは思い出したのです。これによって、アナグラム説が正しいことが証明されたのです。

ガードナーはさらに、著作権登録の記録を調べることにしました。すると、本を印刷したマッケンジー社が、アードネスの代理で登録している書類が見つかりました。

そのような探索が続けられていることがマジシャンに伝わり、1947年になって、アンドリュースの友達だったという、エド・プラットが見つかりました。彼の証言により、アードネスの本名が、Milton Franklyn Andrews であることがわかりました。その名前によって調査を続けると、とんでもないことが判明したのです。アンドリュースは自分の妻を殺し、1905年に自らの命をも絶ったのです。

カーディシャンの尊敬すべきアードネス探求の物語、このような悲惨な結末で終わるのはたいへん悲しいことですが、歴史は変えられません。アードネスが残したカード

マジックに対する財産の価値も変わらない、ということ胸にとどめて幕を閉じることいたします。

その後もアードネスの正体を追求するマジシャンが多く、ガードナーのこの説が100%正しいとまではされていませんが、有力な説であるようです。(加藤)



---

## 母へ捧げた "JINX"

= マックス・アブラムズ、"The Life and Times of a Legend, Annemann"、1992 年 =

---

セオダー・アンネマンの書いた本や雑誌に書いたものを1冊にまとめた "The Life and Times of a Legend, Annemann" (伝説のアンネマン、その人と時代) がマックス・アブラムズによって編纂され、1992 年に発行されました。同書の冒頭部分に、アンネマンがマジックを始めたころの出来事と、そしてジンクスが 50 号を迎えて1冊の合本になったときの、興味あるエピソードが書かれています。(加藤)

1907 年にニューヨーク州、ウェイヴァリーに生まれたアンネマンは、11 歳のころに友達から 'ボール&ベース' のマジックを見せられたときに、マジックへの興味が湧き起こりました。あまりにもマジックに夢中になり、学業がおろそかになったため、心配した母フラヴィアはマジックをあきらめさせようと、ある時マジックの道具や本を燃やしてしまいました。

それから 15 年後に、アンネマンが "ジンクス" を 50 号まで発行したとき、50 号を合本して、母へ捧げたのでした。フラヴィアはつぎのように語っています。

「私はずっと、彼の本や道具を燃やしたことを悪いと思いつづけてきました。学校をきちんと卒業して欲しいという気持ちがそうさせたのです。一生懸命やめさせようとしたのですが、結局マジックの方が勝ったのです。彼は悪意ある仕返しはしたことはありませんが、そのときの出来事の締めくくりとして、"ジンクス" の合本を送ってきました。その最初のページにつぎのように書かれていました」。

### 親愛なる母へ

この本のページをめくるとき、あなたが私の本を燃やしたことを思い出すでしょう。でも悔いることはありません。あなたが燃やしてしまったからこそ、私は自分で書かなければいけないと決意したのです。有り難う。でもこれは燃やさないでください。

1941 年 12 月、"ジンクス" は、アンネマンの死とともに 151 号で幕を閉じました。アンネマンがマジック創作にかけた意欲は、すぐにつぎの世代に受け継がれることになります。翌年の 2 月には、ウォルター・ギブソンを編集者として、"Phoenix" がスタートしました。

アンネマンの意志をギブソンが受け継いだことを、マジックの歴史研究家のジョン・グロスマンは、「Phoenix は、燃えた灰の中からふたたび飛び立ちました」と書いています。

この表現が、アンネマンの母の行為に端を発していることはあきらかです。Phoenix とは不死鳥のことですから、まさにアンネマンの意志を受け継ぐのに適切な名前でした。

“Phoenix” のあとは、続いて “New Phoenix” に受け継がれ、さらに現代クローズアップマジックの先鋒である、カール・ファルブズが発行する “Pallbearere’s Review” へと、マジック創作のバトンは受け継がれてきたのです。

---

◆◆◆

## タッチの差で考案者になれなかったマジシャン

= アレックス・エルムズレイ、"The Collected Works Of Alex Elmsley Vol.2"、1994年 =

---

◆◆◆

あるマジシャンの考案した技法やマジックが、他のマジシャンが先に考案したものだとかあとから指摘されることがあります。ときには論争になって、友人の話や手紙など、色々な証拠を提示して証明しようとすることもありましたが、しかしそのようなケースはたいていの場合、当事者がほとんど同時期に同じことを考えたという結論に達することが多いようです。

これからお話しするのは、たった7日間、発表する時期が遅かったために、ある原理の考案者が別のマジシャンとして歴史に残った例です。

'サイクリックスタック'に類似するスタックとして、'ステイスタック'があります。トップとボトム、トップから2枚目とボトムから2枚目、トップから2枚目とボトムから2枚目、以下同様にトップとボトムから同じ枚数目に、同色同数カードが配置されているスタックです。

ステイスタックされたデッキは、何回中央から分けてファローシャフルしても、ステイスタック状態が変わらないという性質があります。その性質をラズダックが発見し、雑誌"Cardiste"第1号(1957年刊)に発表しました。

さて、"The Collected Works Of Alex Elmsley"の中で、エルムズレイがつぎのように書いています。

"私は独自にステイスタックを発見したのですが、その1週間後に、カーディスト第1号をラズダックから受け取りました"。

"あとの祭り"とはこのようなことを言うのでしょうか。ビドルムーブの場合でも、"トニー・カルディオが同じやり方を先に考えていた"と、エドワード・マルローが主張しましたが、先に公表され、先に公表した人の考案として定着したものは、くつがえることはまれです。

---

◆◆◆

## そのときトルコバに何が起こったか？

= デヴィッド・ポウグ、“Magic For Dummies”、1998年7月23日 =

---

◆◆◆

それは1995年、ボストンで開催されたSAMコンベンションにおける出来事でした。トルコバはその大会で初めてコンテストに出場し、彼のオリジナリティ溢れる‘マイザーズドリーム’を演じました。空中からたくさんのコインを出現させるマジックです。つぎからつぎへとコインが出現し、バケツがいっぱいになっていきました。そのときバックで流れていたのは、スコット・ジョフリンの“エンタイナー”でした。

ところがそのとき、とんでもない恐怖がトルコバをおそいました。サウンドが突然停止してしまっただけです。しばらくの間、トルコバの動作も止まりました。彼は数秒間、どうしてよいかわからずに、息の根を止められた気持ちでした。

幸い“エンタイナー”は誰でも知っている曲であったため、トルコバのマジシャン仲間がそのメロディを歌い出したのです。トルコバは勇気づけられ、観客に向かって指揮をとる演技をして、観客全員の参加をうながしました。観客はそれに応え、かくしてトルコバの美しい演技は続けられました。そして運のよいことに彼の演技のクライマックスに合わせてサウンドが回復し、彼の演技は曲のエンディングとともに終わりました。観客はスタンディングオベーションし、そして彼は優勝したのです。

私は運よくこの場に居合わせました。その見事な結末に、もしかしたらトルコバの演出ではないかという考えもよぎりました。その後トルコバ氏とはマジックカフェで会話を交わす機会もあり、そのようなずい演出など考えつくはずのない、誠実な人とわかりました。この話と同様に、彼のコインプロダクションは素晴らしいものでした。(加藤)

---

## マジシャンのゴール

= ホワン・タマリッツ、“MAGIC WAY” 前書きより、1998 年 =

---

トリックや手順がきちんとまとまり、それらをしっかりと体得し、実際にうまく演じて観客を驚かせるようになったら、それでマジシャンは仕事を完了したといえるでしょうか。私の答えは、“I don't think so.”(私はそうは思わない)です。何か欠けています。マジックを見せている最中と、マジックが終わったあとに、観客が何を考えているか、彼らの心にどのような印象を残したか、彼らがマジックで使われた手法のどれかに疑いを持たなかったか、などを知る必要があるのです。マジシャンは、観客が“種がわからない”というだけでなく、観客が考える糸口をも与えず、やり方を漠然とでも想像させない、というレベルまで到達しなければなりません。

さらにいうならば、彼らに真の方法や、トリックを見抜くのはとうてい不可能だと思いきませることが必要です。私たちは観客に対して、演技中と演技後において、疑いを持つことを忘れさせ、方法を分析しようという気持ちを抱かせないようにすべきです。観客はただ、不思議を享受し、驚き、目の前で見たものに魅了されるべきなのです。観客がそのような状態になるまで、マジシャンは不思議さのインパクトを強めるように努力しなければいけません。(後略)

私はこの言葉野中の、“目の前で見たものに魅了されるべきなのです”が大好きです。英語では“fascinate”と表現されていました。(加藤)

---

◆◆◆

## アイムソーリー、リチャード

= 加藤英夫、"cardmagic@random.002"、2001年11月8日 =

---

◆◆◆

私の古本の入手先は、リチャード・ハッチ氏の経営する、H&R Magic Books です。最初は GENII の広告からコンタクトしたのですが、何回か注文するうちに、色々こちらの希望に答えてくれるようになったので、いまではリチャードさんが、私のカードマジック文献ハントの良き協力者となっています。

彼のところに "Linking Ring" がまとまってあると知ったので、全部でどれだけあるかたずねたら、最近までの 54 年分全巻と、それ以前のがバラバラで 92 冊あるとのことでした。合計 740 冊です。このときを逃してはならないと、全部買うぞと注文を出したのです。

するとリチャードはびっくり仰天し、「加藤、本当にそんなに買うのか」とすぐにメールを寄越してきました。本を売るのが商売なのに、買う人に向かって本当に買うのかとは変な話ですが、じつのところ値段以上にびびったのは、荷物の重量が 140kg になるということです。妻にこの話をしたら、一瞬いやな雰囲気は漂いました。「いったいそんなのどこに置くのよ」という声が、あなたにも聞こえませんでしたか。

さて注文を出した翌日、超バッドタイミングとはこのことです。IBM のホームページを開いた私は、本当に肝を冷やしました。何とつい最近、いままで出版された "Linking Ring" すべての号が、3 枚組の CD で出版されたことがわかったのです。140kg に対して 3 枚の CD です。値段は \$1400 に対して \$300 です。あなたはどちらを選びますか。私は泡をくってリチャードにメールしました。

Please stop shipping Linking Rings to me.

I just found IBM published CD version of Linking Rings.

As CD version is more convenient for me. (not 140 kg).

Understand this situation and stop shipping Linking Rings.

どうですか、私の英語でも、泡を食っている感じが出ているでしょう。これに対するリチャードのメールもすごい迫力がありました。彼のメールを無断でのせられないので要約すると「1 日かけて全部の号を整理して、6 つのカートンに納めたのに、何てことを言うんだ」といった感じです。

「ごめん、私の不注意で迷惑をかけてしまって」と謝ったあと、何とか彼の気持ちを静めようとして、私はそれほど積極的ではなかったのですが、"MUM" をあるだけ送

れという注文を出したのです。そうしたらすぐにメールが返ってきて、なんと MUM も 520 冊あるというのです。けっきょく 100kg 近い荷物が、11 月の末に入ってくることになりました。

まあいいでしょう。私のため、日本のマジック界のためになることですから。因みに、“Linking Ring” の CD は、IBM の会員しか購入できないため、現在入会のための申込書を請求したところです。CD や雑誌が到着したら、またそのことについて書くことにいたしましょう。

追記（2013 年 7 月 7 日）

520 冊の雑誌を部屋に置いておくわけにはいかないので、私はすべての号に目を通し、カードマジックについて重要な情報がない号を捨てることにいたしました。その作業にどれだけ時間がかかったかおぼえていませんが、捨てなかった号はいまでも倉庫にしまってあります。そしてときたま適当な号を取り出して読んでいます。

---

ただ者じゃないぞ、ボブ・ロング  
= 加藤英夫、"cardmagic@random.007、2002年2月1日 =

---

アマゾンに注文していた、ボブ・ロングの本が届きました。彼はアメリカの Sterling Publishing Co.,Ltd. という、一般向け出版社からやさしいカードマジック書を多く出しています。Dover 社から多くの一般書を出しているカール・ファルブズのライバルともいえる存在です。

私は7,8年まえにボブ・ロングの本を読んだとき、たわいのないカードマジックばかり書かれた本だと思い、すぐ捨ててしまいました。その後マジックランドで小野坂東氏と話をしたときに、トンさんはボブ・ロングの書いているようなカードマジックが好きだと言われました。その時点で私の私には、トンさんに賛成する気持ちを持ってませんでした。

しかし最近アメリカでもボブ・ロングの書いているものが注目されるようになってきたため、今回入手可能なものをすべて購入したのです。そして1冊目に "The Little Giant Book Of Card tricks" を読んで、あのときの私はトンさんほどの選択眼、洞察力がなかったと痛感したのです。

同書の最初に解説されている 'A Good Match' を説明します。

aさんにデッキを渡し、よくシャフルさせます。そしてあなたは後ろ向きになります。2つの山に同数のカードをディールさせますが、枚数は10枚前後の適当な枚数を相手に決めさせます。残りのデッキをわきに捨てさせます。

ひとつの山をaさんに、他方の山をbさんの前に置かせます。それぞれの客に適当なところからカットさせ、持ち上げたカードのボトムカードをのぞいておぼえさせます。そしてaさんのカードをテーブルに残っているbさんのカードの上に重ねさせ、bさんのカードを同じくaさんのカードの上に重ねてもらいます。それからどちらかのポケットを他方に重ねてもらいます。

前に向き直ります。カードを何回かカットさせ、2人のカードがどこにいったか誰もわからないと強調します。マーリンというマジシャンが得意とした不思議な混ぜ方を行うとあって、カードを取り上げて裏向きに持ち、ミルクシャフルを行います。すなわち、トップカードとボトムカードを同時に引き抜き、その2枚をテーブルにディールし、以下同様に2枚ずつ取ってテーブル上のカードに重ねていきます。

つぎは表向きにカードを2枚ずつ取っていくとあって、表向きでミルクシャフルを行い、



2枚ずつテーブルに置いていきますが、2人のどちらかのカードが表に出たらストップをかけてくれと言います。ストップがかかったら、見えているカードを選んだ客とは違う客に、彼のカードを名乗らせます。そして2枚を広げ、2人のカードがいっしょに出てきことを示します。

2組の同数枚パケットを適当な位置からカットして、交差させて重ねることによって、カットした位置の2枚のカード(ボトムカード)は、一方のカードから他方のカードまでの距離(枚数)が等しい状態になります。このことはフリーカットプリンシプルの性質のひとつであり、この性質を使ったマジックは色々あります。エルムズレイの 'Cross 25' が有名ですね。しかしながら私の知る限りでは、お互いに等距離に配置された2枚が、2回のミルクシャフルによってくつつくという原理は、このマジックにおいて初めて知りました。ロングがこの原理を見つけたのだとしたら、発見者として歴史に記されるだけの価値がありますが、彼はそのことについては言及していません。

ボブ・ロングの説明では、2人に交差してカードを重ねさせ、2つのパイルを重ねさせてから前に向くとしていますが、私はつぎのようにした方がよいと思います。交差して重ねさせた時点で前に向き直り、「お互いに反対のカードの上に重ねましたから、こちらに何枚あって、こちらに何枚あるかわかりませんし、もちろん何枚目に2人のカードがあるかもわかりません」と言います。それからパイルを重ねさせ、原案と同様に続けます。そのようにした方が、交差して重ねさせたことへの理由づけができますし、2人のカードの位置が自由に決定された印象を強めることができます。

というわけで、いきなり私の知らない面白い原理を教えられました。ところが上記のトリックで使われている、フリーカットプリンシプルによって等距離に配置する手法を使ったトリックとして、ボブ・ロングの "Mystifying Card Tricks"(1997年)では、つぎのようにつまらないやり方をしています。

2人の客のカードが等差配置になった状態で、1人目のカードを当てると言ってカードを広げていき、当てることができないと言って、その客のカードがなんであるかをたずねます。そのカードを知ることによって、2人目のカードがそのカードから何枚目にあるかわかりますから、2人目のカードを当てます。

1人目のカードは当てられなかったが、2人目のカードは当てられるという、まことに奇妙なマジックを書いているのです。「その大胆さがすごいんだ」と、トンさんの声が聞こえるような気もしますが、他の作品においても、ふつつう私たちがやらないようなことを、ボブ・ロングは平然とやっているのです。そして多くのへんなマジックの中に、ときどききらりと光るマジックが混じっていますから、ボブ・ロングは油断なりません。

しかしながら、ボブ・ロングがふつつうのクリエイターと発想の次元(レベル)が違うから、

ふつうのクリエイターには考えつかないようなマジックを生み出せるのだと、彼を高く評価する気にもなれません。たぶん、彼は Sterling Publishing というお得意さんを持ち、つぎつぎと一般書を出させる立場にあるために、思いつくものを何でも書いてしまうということが習性となっており、その結果が彼の多くの著書に見られるのです。

そうです。きらりと光る傑作を生み出すには、たくさんマジックを考えるというのが、たいいていの優れたクリエイターの手法であるのです。このような話をしていると、エドワード・マルローを思い出します。彼こそ、ホブ・ロングをはるかに上まわる多くの作品を発表し、それらの中からいくつかの傑作を残した天才です。

そして沢浩を思い出します。まえにどこかに書いた気がしますが、彼がロープマジックの創作に熱中したときは、タンスの中に 100 種類ぐらいの考案したマジックのロープの束が入っていました。ルーヴァー・フィドラーの 'ブルークリスタル' に凝ったころは、30 種類以上の応用マジックを生み出しました。しかし沢浩は、考案したものをすべて発表することはありません。彼は、よいマジックだと思ったものだけを人前で演じ、しかもほとんど発表していないのです。

私はけして沢浩を誉めて、エドワード・マルローやボブ・ロングを批判しているわけではありません。クリエイターのスタイルについて語っているのであり、彼等の姿を理解することによって、自分がどのようにしたら多くのよいアイデアを生み出すことができ、マジック界に貢献できるかを探る参考にできたらよいと考えるのです。

ボブ・ロングのたったひとつのカードマジックから、大げさな話に展開してしまいましたが、ボブ・ロングからはとても大切なことを再確認させられました。“いままでの常識とらわれずに考えて、どんどんアウトプットせよ”ということです。そうすればユニークなアイデアを見つけられるチャンスが広がるのです。いずれにせよ、ときどき面白いアイデアを提供してくれるボブ・ロングは“ただ者”ではありません。

---

## チャニング・ポロック物語

= パトリック・マーチン、雑誌 "MAGIC", 2001 年 8 月 =

---

チャニング・ポロックは、1926 年 8 月 16 日、カリフォルニア州のセメント切り出しの町で生まれました。父、ロバート・バーンズ・ポロックはポートランドセメント会社のマネージャーでした。母は、マージョリー。チャニングが生まれる 2 カ月まえ、家族は著名な劇作家チャニング・ポロックのレクチャーを受講して感銘を受け、こんど生まれるのが男の子なら、チャニングと名づけようと決めました。

1929 年の恐慌で父の会社はつぶれ、セメントの町全体が消滅してしまいました。その後父は、シェル石油に勤務し、農家にガソリンを売り歩きました。1935 年にサクラメントに落ち着きました。1937 年、チャニングが小学生のときに、あるマジシャンが小学校を訪れました。彼はチャニングを舞台上に上げ、紙の中で消したミルクをチャニングの肘からくみ出しました。このときの不思議な体験が、ずっと彼の頭から消えることはありませんでした。

高校時代はアメフトとバスケットボールの選手でした。ナオミ・フェルプスと恋に落ちましたが、やがて戦争が二人の中を一時的に引き裂くことになります。長男のノーマンはそのころ海軍兵士としてフィリピンに駐屯し、次男のロバート jr は陸軍兵士でした。1944 年 7 月、17 歳のチャニングは陸軍に志願し、上陸用ボートを作る会社で技師としての訓練を受けました。彼は沖縄に向かう船の上で、仲間の一人がカードやコインのマジックを同僚に見せるのを見ていました。そしてカードゲームのテーブルでは、ダブルリフトとかダンバリーディリュージョン的なトリックを教わりました。

1946 年に退役し、大学に入り、色々なアルバイトをやりました。その中のひとつ、ビンにラベルを貼る工場で働いていたときに、エル・マーチンがスベンガリデッキをやっているのを見て、兵士時代に見たマジックよりも驚きました。そのときチャニングはマーチンの持っていたサーストンの "Card Tricks" という本を譲ってもらいました。最初におぼえたのは、フロント & バックパームでした。その本の内容をマスターすると、つぎはヒュガードの "Modern Magic Manual" を図書館で見つけ、そのあとはマジシャンが出演する情報を得たらどこへでも出かけるようになりました。バージル & ジュリー、リー・ゲブルなどででしたが、とくにゲブルの荘厳な舞台に魅了されました。

そしてチャニングが本格的にマジックを始めるきっかけとなったのは、ファーマシーのガチャポンで出てくるマジックの道具を得たときでした。カップ & ボール、インポトルなど、いちばん気に入ったのは何重もの容器からサインされたコインが出てくるというネスト・オブ・ボックスでした。このマジックを演ずるためにフレンチドロップもおぼえ

ました。

高校時代の恋人のナオミと結婚し、長男の誕生日にナオミの家族がやってきたとき、ロス・アンゼルスとの知り合いにマジック関係者がいると言われ、紹介の手紙を書いてもらうことになりました。その人こそ、GENII の創始者ウィリアム・ラーセンでした。ラーセンから届いた GENII の中に、チャベツスタジオの広告がありました。その年の PCAM 大会の優勝者がチャベツスタジオ出身者であったこともあり、彼はすぐにサクラメント州立大学を中退し、ロスへと移りました。

ベニー・チャベツと妻のマリオンは、1930 年から 1940 年代にかけてカード、ボール、タバコのマニピュレーションで活躍していましたが、1941 年にスタジオを始めました。チャニングは 8 カ月のコースを 4 カ月で終了し、彼の優秀さに感銘を受けたベニーとマリオンは、彼にインストラクターとして働いてもらうことにしました。

チャニングはカードとシガレットのマニピュレーションからスタートして、それにロープタイとブレンドを加えました。そしてブレンドシルクからウサギを取り出しました。ある日農家にウサギを買いにいったときに、野生の鳩を買いました。それを初めて舞台上使ったとき、ライトに驚いた鳩がとんでもなく暴れ回りました。そこですぐにチャニングはその鳩を返しにいきましたが、そのとき農夫は小さくておとなしい鳩として銀鳩を使ったらどうかといわれ、それがチャニングの鳩出しの出発点となったのです。

鳩出しに関しては、チャベツスタジオでも二重になった新聞紙から出現させる方法を習いましたが、メキシコのキャントウーというマジシャンが肩にかけた布から鳩を何羽も出すことを知り、燕尾服からスチールすることを考え始めました。1951 年の PCAM 大会でチャベツスタジオの代表として出演した彼は、鳩出しはほとんど完成していたにもかかわらず、他のマジシャンに知られるのを避けるために、鳩出しはやりませんでした。それでも彼は数々の賞を受賞しました。そのときの舞台にセナー・マルドと天海がいました。

1952 年 USO のアラスカツアーから帰ったチャニングは、興行用のトレーラーで旅を続けましたが、あと1ヶ月で成功しなかったら、マジシャンをやめてサクラメントに戻るとナオミに告げましたが、その 3 週間あとの 1953 年 SAM 大会で大きなチャンスが訪れました。その大会でジェイ・マーシャルから、ショービジネス界の大物、マーク・レディを紹介されたのです。それより以前にチャニングはレディに売り込もうと考えたこともありましたが、断られるのを恐れて実現させませんでした。その後フィラデルフィアでチャニングの舞台を見たレディは、チャニングのマネージャーになろうと申し出ました。そしてそのあとすぐにチャニングの長年の夢であったニューヨークのパレスホテルへの出演が 1954 年 1 月にかない、さらにその 1 週間後にエド・サリバンショー出演をはたしました。

その2月からはニューヨークのエンジェルに出演しましたが、ニューヨークのショーを見る目の肥えた観客の前で演技し続けたために、クールさを保った彼のショーのスタイルが定着したのです。レディはチャニングを一流のナイトスポットだけに出演させました。ボストンのスチューベン、シカゴのパーマーハウス、そしてホワイトハウスのディナーパーティーでアイゼンハワーの前で演技をしたとき、チャニングはくるべき時がきたと確信したのです。

2度目のエド・サリバンショーに出演したあと、ジャック・ペニーのツアーに参加を誘われました。そのショーにはサミー・デービスjrもいました。1954年にAcademy of Magical Artsは27歳のチャニングをマジシャン・オブ・ジ・イヤーに選びました。1955年にレディはチャニングをイギリスに送ることを考えました。イギリスの大物レスリー・グレイドのついでにイギリスでもっとも権威のあるバラエティシアター、パラディアムの出演が決まったのです。そして多くのショーの評論家の絶賛を浴びることになりました。

チャニングはサヴォイホテル、ヒッポドロームにも出演しました。そしてビクトリアパレスではエリザベス二世、フィリップ王子の前でも演じることになります。エリザベス女王から、「いまどこにいらっしゃる」とたずねられたチャニングは、あわてて「ここにいます」と答えてしまいましたが、回転のよいナオミは「ヒッポドロームに出ています」と正しく答えました。

グレイドの組織がBBCで初めてバラエティ番組をプロデュースすることになったとき、最初の番組でチャニングが主役となり、これによってチャニングの存在はいつぱんにイギリス中に知れ渡りました。1957年ロンドンのマジックサークルは、彼を終身会員として迎えました。

そのあとチャニングはローマに渡り、カーサ・デラ・ローサに出演しました。そのあとロンドンに戻り、ピガールに出演するようになり、彼はロンドンを彼の住居と定めることにしました。彼はパリのヌーヴェル・エーヴ、モナコのスポーティングクラブ、フランスとイタリアのリビエラにも出演しました。モナコ王妃グレース・ケリーの誕生日にも出演しました。彼のマジックと美貌に目をつけたイタリアの映画監督、アレッサンドロ・ブレサッチは、1958年に“ヨーロッパの夜”にチャニングを出演させましたが、この映画は彼のキャリアを決定的なものとししました。世界中の人々に知られることとなったのです。

このころから、チャニングは親しい人に彼の鳩出しを教え始めます。フレッド・キャップスが新しいアクトを求めていたとき、チャニングは鳩出しを教えようとして申し出ましたが、キャップスはそれを受け入れませんでした。チャニングの運転手をしていたフランク・ブルックスは、チャニングの演技を丸ごと譲り受け、フランクリンという芸名で成

功しました。イタリアのシルバンもまた、チャニングから鳩のスチールの基本を教わってから、彼自身の鳩出しを完成させました。一方レネ・レバンは“ヨーロッパの夜”を見て以来、自分ではチャニングのようなスタイルはかなわないと悟り、燕尾服を脱ぎ、クローズアップマジックに転向し、現在のスタイルを築きました。日本の島田晴夫やドイツのシーグフリート・フィッシュバッカーなども、チャニングの映画を見て、独自の鳩出しを生み出しました。世界中のいたるところの映画館で、画面を8mmフィルムに撮影するということが行われました。

マジシャンとしての成功のつぎは、映画スターとしてのキャリアが待っていました。いくつかの映画に出演したあとチャニングは、ローマにプリンスチャニングという洋服、香水、アクセサリーの高級店を開きました。

彼の映画はヨーロッパでは成功しましたが、アメリカでは声の吹き替えの失敗もあり、うまくいきませんでした。彼はナオミと離婚したあと、ジョシー・ボウルトンと結婚し、ロスの郊外で密かな生活を始めました。そしてテレビドラマに出演しました。ボナンザにおけるギャングラーのカーター役、ジョン・フリーモントにおけるキット・ガソン役、グレートアドベンチャーにおけるジョン・ショーター役などです。ダニエル・ブーンシリーズでは、マジシャンのフレッチャー役を演じました。

ランス・バートンは、子供のころにチャニング演ずるフレッチャーを見て、鳩を出すのにブラックアートを使っているとばかり思っていました。チャニングは自分自身でもまた、マジックキャッスルを拠点として、人々を助ける“マジシャン”というドラマのシナリオを書きましたが、このドラマについては、その後ビル・ビクスビー主演によって放映されることになります。

チャニングは彼のアクトを発展させるために、イリュージョンに手をつけ始め、双子をテーマにしたものを考え続けました。二人同時のレビテーション、ダブルバニッシュ、二人の胴切りで二人の上半分と下半分が入れ替わるものなどです。チャニングはそれらによってひとつのショーを構成できるまでになりましたが、60年代のラスベガスは、マジックだけでひとつのショーを打つという考えがありませんでしたので、それが実現することはありませんでした。彼は1回だけテレビで演じたあと、ダブル胴切りをメキシコのティファニーに売ってしまいました。そしてダグ・ヘニングが1970年代にブロードウェイで“ザ・マジックショー”を行ったとき、その道具を譲り受けて使いました。

チャニングはけっきょく、7分間の鳩出しだけで仕事を続けました。ハリウッドパレスに2度目の出演のあと、アンディ・ウィリアムスのクリスマススペシャルに出演したころ、ジョシーとの中が悪くなり、3人目の伴侶、コーニー・ショーンと結婚することになります。そして1969年、ヨーロッパの興業から帰ったとき、43歳の若さにして彼は引退することを決意いたしました。

チャニングは名誉と喧噪のハリウッドを離れ、北カリフォルニアの農場を買い、有機栽培を始めます。そして現在でも彼の作るレタスは、サンフランシスコの高級レストランへと納入されています。

彼はまた石油やミネラルウォーター発掘にも手を染めて、いまではその道の権威となっています。

チャニングのアドバイスは多くのマジシャンの成功に影響を与えています。1971年にダグ・ヘニングと会ったとき、「マジックにメッセージを込めなさい」とアドバイスし、このアドバイスがダグのスタイルに大きく影響しました。さらにシークフリード、ランス・バートンも影響を受けました。カパーフィールドさえ、ジュデクスで見たチャニングの演技に影響を受けています。

---

## マジシャンがだまされた日

= 加藤英夫、"cardmagic@random.003"、2001年11月20日 =

---

1985年のFISMマドリッド大会に参加したときのことでした。マドリッドにいくまえに、パリに立ち寄りしました。パリは街全体が中世ヨーロッパを表現する絵画のようであり、とても好きな街のひとつです。しかしながら、そのときに限っては、パリでたいへん嫌な思いをしてしまいました。

地下鉄を待っていると、中国人風の男が地図を広げて、たどたどしい英語で「どこそこに行くにはどういったらよいのか」ときいてくるのです。なぜパリのことを日本人にたずねるのか、いま考えたらおかしいのですが、親切心の強い私としては、一生懸命に助けてあげようと思いました。相手は私と彼の間に地図を広げて、「ここだここだ」などと言っています。そこに地下鉄が滑り込んできました。

しょうがないので地下鉄にのってドアが閉じかけたそのとき、近くにいたフランス人が「あっスリだ」と言ったのです。フランス語を知らない私ですが、意味は分かりました。がしかし、ドアは閉ざされていました。私のバックから盗まれたのは、パスポートと航空チケットでした。航空チケットはすぐにパリの日航で再発行してもらえましたが、パスポートは領事館で発行してもらうのに、2日間かかりました。おかげでパリに2日余分に滞在することになってしまいました。

このスリの手口には、2つのマジックの手法が使われています。まず、地図を広げることによって、秘密の動作を行う場所を隠蔽しています。しかもそのようにする自然な理由づけがされています。そして、私があわてて地下鉄に乗ろうとするそのミスディレクションが絶頂に達したときに、バッグのポケットからパスポートなどを引き抜いたのです。マジシャンがこんな手口に引っかかったのですから、悔しいことこのうえありません。

さて、"MAGIC" 1993年5月号で、リチャード・カウフマンが彼の友人からきいた話として似たような出来事を書いています。

南米の街を観光客の女性が歩いていました。すると突然ジプシーの女性数人に取り囲まれて、手を取られて手相を見せろとせがまれました。女性は手をふりほどこうとしましたが、しっかり捕まれたままです。そこに現れたのが赤ん坊に乳をのませている太った女。なぜかその女が赤ん坊をわきに置いて、女性に向かってあらわになっている乳房から、乳を振りかけたというのです。女性はあわてて渾身の力で逃げようとして、こんどは逃げるのに成功しました。しかしながら、彼女がホテルに逃げ返って、



汚れを落とそうとしたとき、指にはめていた指輪がなくなっているのに気づきました。

リチャード・カウフマンは、これこそ完全なミスディレクションの例であると締めくくっていますが、カウフマンのその言葉に、私はトミー・ワンダーのカップ&ボールを思い出しました。彼の手順では、ボールが前方に転がってしまい、あわててそれを取りに手を伸ばしたとき、反対の手で大きなものをローディングします。この手口はまさに、私のカバンからパンポートを抜いた手口、女性の指から指輪を抜いた手口に似た、強烈なミスディレクションです。

しかし、そのような強烈なミスディレクションは、カウフマンの言うように完全なミスディレクションといえるのでしょうか。盗難にあった私も女性も、あとであのときやられたんだと気づいたように、私はワンダーの演技を見て、瞬間的には驚きましたが、ボールを転がしたことが強烈に印象に残り、すぐにトリックがわかってしまいました。一般の観客に対してどうなのかがわからないので、ワンダーのやり方がよくないとは断言できませんが、強烈すぎるミスディレクションにはそのような問題があります。

皆さん、地下鉄で知らない人に何かをきかれたり、赤ん坊に乳を与えている女性には気をつけましょう。そしてテーブルにボールが転がったときも、。

---

◆◆◆

## 片倉作品の思い出

= 加藤英夫、“cardmagic@random.008”、2002年2月15日 =

---

◆◆◆

ご本人の了解を得て、矢嶋智弘さんからのメールを紹介いたします。

先日のパスワードについての私の愚伸にお返事まで頂いてありがとうございます。またの突然のメールをお許してください。

というのは、私も片倉さんについて忘れられない思い出があるのです。小学校の頃から学芸会（その頃から加藤さんの作品のお世話になっているのですね）の出し物はいつも手品だった私が、本格的にはまったのは大学になってからです。岩手の大学と実家の長野の行き来の中で、年に1回ぐらい、トリックスに足を運びましたが、運悪く一度も片倉さんにはお会いできませんでした。

卒業後、上野を訪れた際、偶然トリックスの支店を見つけ、入ってみるとそこに片倉さんがおられました。うれしさが先立って、その日はお店に入り浸り、今思うとなんとも、。付き合っていたいただいた片倉さんに、今も頭が上がりません。色々なマジックについてのお話、実演、アドバイス、今思い出してもドキドキします。

そんな中で、以前、みかめさんが松本市でレクチャーにいらしたとき、「これは片倉さんの作品だけど、おぼえた方がいいよ」といって見せていただいたマジックがあったので、片倉さんご本人にお願いしたら、快く伝授してくださいました。ところが今、作品の名前はおろか前半部分がどうしても思い出せないのです。概要は以下のとおりです。

4枚のランダムなカードをデッキの上で確認し、テーブルの上に配ると4枚のキングに変わります、すぐに集めて配りなおすと、4枚のA変わります。最後の段階はトップからKKKAAAAKの状態、Kを3枚配り、ブレイクから上のAAAAKをとりあげ1枚のKとして見せ他のKをすくいとり、トップに戻しAを配る、といったものです。

初期の作品だそうですが、実演された時（晩年）は最初の部分が若干違っていたような気がします。私はもう一度この作品を練習して演じてみたいのです。不仕付けをお願いしますが、何か情報をいただければ幸いです。

そのほかお聞きしたパスについてや使い古したカードの使い道などいつか自分のホームページに書きたいと思っています。（まだ作りかけです）。私の拙い演技に親切で的確なアドバイスをしてくれた片倉さん、そしてこう言ってくれました。

「発表しなさい、作品は発表できるうちに沢山したほうがいいよ」。

その言葉が意味を持って鮮明に私の中で鮮明によみがえったのは、それから一年後のことです。片倉さんはこうも言っておられました。

「いい作品を作るには、発表して人の手に渡して、そのバリエーションを研究するのがいちばんだ」。

cardmaigc@random No5の記事を読んだとき、こんな思い出が自然と思い出されたので、一筆した次第です。それから、初給料で買った念願のターベルコースの訳者の方と、こんな形でコミュニケーションがとれることを、本当にうれしく思います。ますますのご発展をお祈りいたします。

矢嶋さんが述べられているのは、“ニュー・ゼネレーション+α”(坂井弘幸著、マジックランド、1987年刊)に解説されている、片倉氏不朽の名作といわれている‘ダブルショック’だと思われます。同書はまだマジックランドで販売されています。(6300円)。片倉氏は、私が“カードマジック研究第3巻”に書いた‘幻覚’が難しいので、‘ダブルショック’を考案したと言われていました。なお、片倉氏の同作品の別法として、“ラリー・ジェニングスのカードマジック入門”に、‘ダブルダウン’が解説されています。

片倉さんが矢嶋さんに語った言葉、「いい作品を作るには、発表して人の手に渡して、そのバリエーションを研究するのがいちばんだ」というのは、まさに名言です。マジックというのは、色々な観点から磨かれてよくなっていく、ということを描べられているのだと思います。

---

◆◆◆

## あの人は帰ってこない

= 加藤英夫、“Card Magic Monthly” 第3号、2002年6月15日 =

---

◆◆◆

57歳のもっとも働き盛りのときに、ゲリー・ウーレーはこの世を去りました。2002年6月8日のことでした。インターネットの“MAGIC TIMES”でそのニュースを読んだとき、私はキーボードの上に手を置いたまま、しばらく身動きできませんでした。

もう20年以上たつてでしょうか。私はケベックのウーレーの家を訪問し、3泊して英語の説明書を書く作業をウーレー氏とともに行いました。彼は当時、テンヨーの輸出用マジック製品のための説明書の著者として協力してくれていたのです。

彼のクローズアップの演技をターベルコース出版記念パーティで見た人は、いかに彼が演出にたけていたかを目撃しているはずです。その才能が、のちにマジックショーのプロデューサーとして花を咲かせることにつながるとは、その当時の私には想像できませんでした。だいたい彼は、ビジネスコンサルタントとして成功していて、広大な土地に客室が5部屋あり、ワインセラーさえ持つ豪邸に住んでいたのです。

彼は政界とも関係があり、カナダ首相とも友人関係にありました。当時のアメリカ大統領レーガン氏と歓談する写真も見たことがあります。

その彼が本業を捨てて、マジックを本業にしたと聞いたときには、やっていけるのかどうかと心配をしましたが、いつの間にかマジック界の超大物となっていました。

私にとってちょっと残念なのは、彼が私のカードマジックを書いてカミランドマジックアカデミーから出版しようと言っていた計画が、彼の仕事が忙しくなってしまう、いつの間にか消滅してしまったことです。でも、彼のようなマジック界の大物が、途中まで原稿を書いてくれたということだけでも、私の大切な思い出となりました。

ウーレー氏の逝去を悲しむ声は大きく、いくつかの新聞で取り上げられているようです。ラスベガス・レビュー・ジャーナル6月9日号からJ.M. カリル氏の文章を抜粋して紹介いたします。

ラスベガスの数多くのマジックショーや人気のあったテレビのマジック番組のプロデューサーであったゲリー・ウーレー (Gary Ouellet) は、土曜の夜この世を去りました。享年57歳でした。

ウーレーはポルトガルでテレビ番組を制作中に、心臓麻痺で亡くなったとウーレーの友

人でありランス・バートンの広報担当者であるウェイン・バーナスは述べています。

テレビ番組のライターおよびプロデューサーとして成功したウーレーは、ランス・バートンやデヴィッド・カパーフィールドなどのショー制作にも関係し、そしてNBCの"ワールド・グレイテスト・マジック"のプロデューサーとして名声を確立いたしました。

彼はまた、ヴェネチアンホテルの"マジック界のファーストレディ・メリンダ"や彼女のテレビ番組を制作し監督いたしました。サハラホテルのスティヴ・ウィリックのショーもウーレーが手がけたものです。

「ウーレーのマジック界への影響は多大なものがあります」とランス・バートンは述べています。そして「マジックが現在のようにポピュラーになったのに、彼が多くの部分を占めています。マジック界はすべての関係者が、ウーレーの死を悲しみ、喪に服しています。私は彼を失ったことに痛みを感じます」と語っています。

ウーレーはロス・アンゼルスがホームベースだと言っていたましたが、実際にはほとんどの時間をラスベガスで過ごしていました。彼のビジネスパートナーであるデヴィッド・ツマロフとは、昨年共同でアラジンホテルのコメディ"ティーズ"もプロデュースしています。「彼はラスベガスに、じつに多くの足跡を残していきました」と、ツマロフは語っています。

「ウーレー自身も卓越したアマチュアマジシャンでした」と、SAMのラスベガス支部長のゲリー・ダーウィンが語り、そして「彼は本当に一流の男だったし、じつに頭が切れた男だった」と話しています。

マジック界も、そして私もウーレーを失ったのですが、失ったときにこそ、彼から与えられたものがあることを感じるすることができます。彼は間違いなくマジシャンの地位を向上させてくれました。悲しみを通して幸せを感じるができる、そんな気持ちを抱かせてくれるウーレーは、やはりバーノンと同じように、マジックに対する偉大なる情熱の持ち主だったのです。

---

◆◆◆

## 天洋先生の葬式にて

= 加藤英夫、“カードマジック研究日記”、2002年9月27日 =

---

◆◆◆

今日は松旭齋天洋師の23回忌追善供養に出席した。お経が本妙寺の本堂に響き渡る間、私は天洋先生に与えられた数々の経験を思い出していた。先生は毎月上野の本牧亭で“奇術楽しみ会”を開催されていたことがある。私がプロマジシャンになろうとしていたころのことである。包帯アクトを初めて演じたのも、ダイペーアラカルトの土台となるマジックを演じたのも本牧亭だった。大きな一座で金沢と富山で公演したときは、大きな舞台を踏ませていただいた。

天洋先生が亡くなる何日かまえから、多くのマジック関係者が意識のない先生の看病をされたが、私もその一人だった。ある朝私が病院に着く直前に先生は息を引き取られていた。天海先生のときも私は亡くなる前日にお会いしている。あれは私が日本マジックアカデミーという名でマジックの専門誌を出していたときのこと、名古屋の先生を何回かたずねては、そのインタビューをもとに“天海奇術講座”を連載していたのだ。ある夜に名古屋から帰ってきたら、先生が亡くなったという電話が入っていた。私は朝早くの新幹線でまた名古屋に向かった。

いまマジックの世界に入ってきつつある新しいマジック愛好家は、天洋先生や天海先生の偉大さを知らない。名前さえも知らない人も多い。ダイ・バーノンの名前さえ知らない初心者が多いという。Mr.マリックなどを見てマジックの世界に足を踏み入れつつある人が多いことは、会社への報道関係の取材が急増していることや、私のサイトへの申込者のコメントを見てもわかる。

昔はマジックの知識を得ようとしたら、自分から出かけて行って求めるものを入手する努力が必要だった。マジックの道具にしたって、限られたデパートのマジックコーナーにしかなかった。海外の本も丸善などで注文して取り寄せたものだ。いまはもっと手近なところで買える。ハンズやトイザラスなどがそうだ。インターネットにアクセスすれば、いきなりジョンソンだとかケネディの商品が買えるのだ。

そのような時代のギャップ、過去に積み重ねられたマジック界の財産とか歴史を知らないで、興味を持ったら道具でも本でもビデオでも、そして私の書いているようなレベルのコンテンツまで、初心者がすぐに入手できる時代を、はたして豊かな時代と呼ぶのだろうか。

テレビでマジック番組が多かったことや、漫画にマジシャンが登場したことなどは、マジックにマイナスとプラスの両面を与えてきたと思われるが、少なくともマジックをやり

たいと思う人を劇的に増やそうとしていることは、とくに最近会社へのマスコミからの取材、それもマジックという趣味がブームになっているという観点での取材が急激していることや、私のサイトへの初心者の申込者がまえより多くなっていることで強く感じられる。マジックを指導、啓蒙する立場にある人は、それらの人々にどのように対処するか熟考するべき時がきていると思う。

たとえば マジック道具を製造する会社は、説明書をよりわかりやすくすることを検討することが望まれる。マジッククラブの指導のあり方も、明確にそのような初心者を十分配慮したものが検討される時である。私のサイトでさえ、対処しなければならない時がきているのだ。最近申込を受けた初心者の方のメールの中に、つぎのような文章があった。

最近マジックに興味を持って始めたばかりの者ですが、加藤さんのコンテンツの見本も、ある本の用語解説とにらめっこをして読みました。これからも読みたいので登録よろしく願います。

というものである。このメールを読んで、私がいままで初心者対策に腰が引けていたことを強く反省させられた。私はここで宣言しておくが、私はこれからも初心者を考慮したコンテンツを書くつもりはまったくない。私がやりたいことは、カードマジックの奥深い部分を探ることであり、カードマジックのレベルを高いものにするのに一役かいたいのだ。

だがしかし上記のメールを読んで、内容のレベルを下げないでも、少なくとも適切な用語集を準備すれば、上記のような意欲のある初心者の方でも私の書いている文章をかなり理解できる可能性があるということに気づかされた。内容のレベルは下げないが、入口の敷居は低くしようというのだ。そして私は“カードマジック用語辞典”を編纂することを決意した。今日、そのための検索ページの土台をHTMLで作成したところだ。

1週間まえにこの日記を書き始めて、いまのところ毎日欠かさず書き続けているし、“OUR MAGIC”のつぎの章の翻訳も開始したところだ。そして毎月プリントアウトすると30ページぐらいになる“CARD MAGIC MONTHLY”をしっかりと書かなければならない。どんなに新しいコンテンツを始めようとも、この屋台骨を揺るがすわけにはいかない。

マスケリンが残してくれたもの、初代社長、山田 昭氏が立派なテンヨーを築かれたこと、そしてその出発点となった天洋先生が昭和6年に三越でマジックの販売を始められたことなど、いまのマジック界の土台を築いてきた人々に思いをはせていたときに、お経は終わっていた。

---

## 狐が蜂にだまされた日

= 著者不明、“e-bay オークション”、2002年8月13日 =

---

これは e-bay オークションで、以下の短い童話を読んで、それを出版する権利を買わないかと提案したものです。そこに文章を公表しておいて、それを出版しないかというのはあくまでも皮肉であり、その文章をマジシャンに読ませたくてその形態を借りたものだと思います。(加藤)

これは狐(フォックス)の物語です。狐の名前はポールでした。ここに登場するポールという狐の職業はマジシャンでした。狐のポールがもっとも得意としていたのは、何千年もの歴史を持つマジックのクラシック、'カップ&ボール'でした。このマジックについては、誰も'権利'など主張することはできませんが、それでも我がポールは独自の美しい'カップ&ボール'を作りました。

狐のポールの親友に、朝のしずく(モーニングデュー)がいて、彼の名前はダニーでした。狐のポールは朝のしずくのダニーに、彼の'カップ&ボール'の製造権と販売権を譲りました。そしてダニーもまた見事な'カップ&ボール'を作り、誰からも愛されるようになりました。

時が流れてダニーが歳をとり、素晴らしい製品を作れなくなりました。森に住む蜂(ビー)はそのことを知ってしめたと思いました。蜂の名前はバズでした。森に住む他の動物たちはバズという蜂(ビー)と取引するのはよくないと知っていましたが、お人好しのダニーは、ポールの'カップ&ボール'の製造権と販売権をバズに売り渡すことにしました。そして持っていた在庫も渡しました。

さあ皆さん、ここから話が面白くなっていきます。朝のしずくのダニーは神様を信ずるぐらいの人でしたし、彼の妻も同じでした。蜂のバズがそのあと一銭も払わなかったという事実を知ったとしても、皆さんは驚かないでしょう。ダニーは文句を言わず、彼の妻も文句を言いませんでした。彼女の晩年の生活は困窮にあえいでいたにもかかわらずです。

蜂のバズがそのあととった行動は、皆さんの想像とは違います。その道具を売って一人で儲けたのではありません。それよりもっと悪いことに、バズは他のマジシャンからかすめ取ったノートや資料と同じように、ポールの素晴らしい'カップ&ボール'をもまた、死蔵させてしまったのです。

さらにバズは他の人が所有していたポールの'カップ&ボール'を販売するのをじゃま



したのです。どうしてそんなことをしたのでしょうか。理由はわかりません。バズがポールから権利を奪う以前に作られた製品さえ、他の人が売ることをじゃましました。はたしてバズは支払わなかったものに対して権利を持っていると言えるのでしょうか。

以上がバズというビーと、ポールというフォックスと、ダニーというデューの物語です。この物語には登場人物は一部異なりますが、続編があります。農家（ファーマー）のボブもまた、同じような目にあったのですが、続編をすべて書いていたら、きりがありませんので、このへんにしておきましょう。

著者あとがき：上記に登場する名前は、いっさい架空の名前であり、ストーリーもフィクションであり、著者の想像の産物であることをお断りしておきます。

この物語が架空のものであったとしても、私はどうやら同じ蜂にさされたことがあるようです。すなわち、バーノンが1969年に来日したとき、私からのお土産として、私の作品をタイプしたリーフレットをさし上げたのですが、何故かそれがこの話に出てくる蜂に該当する人物の手に渡り、その蜂は出版したいと私に持ちかけました。私は許可を与えましたが、そのあとすぐに彼からは音信不通となりました。

どうやらこの蜂は、人の持っていない貴重なものをコレクションするという異常な精神の持ち主なのかも知れません。皆さんも貴重な資料を持っていたら、この蜂が近寄ってきたら逃げるのが賢明だと思います。（加藤）

---

## 看護師の物語

= ジェイ、"Magic Café"、2002年8月26日 =

---

皆さんこんにちは。今日はマジックと私の本業にまつわるお話をしたいと思います。私は男性看護師ですが、ジェフ・マクブライドが私のことを、「北ニュージャージーでいちばんの看護師マジシャン」と言ってくれたことがあります。もちろんお世辞に決まっていますが、ちょっと気をよくしたものです。私は患者とその家族が必要だと思ったときに、マジックを見せることにしています。彼等が落ち込んでいたり、寂しかったり、そして恐れているときに、マジックはとても効果があるのです。

あるとき14歳の少年が重病の父を見舞いにやってきました。彼は病室の片隅の椅子に座って、気まずい思いをしていました。彼はお母さんとゲームをするためにカード組を持っていましたが、私もいつも通り一組持っていました。そのカードは'カードワープ'のセットがされていました。私は少年にカードをプレイしたいかとたずねると、彼はうなずきました。ゲームよりもっと面白いものを見せようと言って、私は'カードワープ'をやって見せました。

とたんに少年の顔は輝き、驚きと喜びの表情で彼はテーブルからちぎれたカードを取り、やり方を考えようとしました。もちろんわかるはずはありません。彼がやり方を教えてくれと言うので、私はこのつぎ見舞いにくるまで考えてごらんと行って、カード組を上げました。それまで父を見舞いにくるのを嫌がっていた彼は、「お母さん、つぎはいつここに来るの。明日来られるの」と言いました。これで私の仕事は完了です。

その後まだ少年とは会う機会がありませんが、つぎにあったら必ずやり方を教えて上げるつもりです。彼が得意がって学校で友達に見せているところを想像したら、それはとても素晴らしいことだと思います。「マジックのタネを教えるはならない」などというルールはこのような場合にあるではありません。そんなことよりもっと大切なことがあるのです。少年に元気を与えることができるとしたら、それはマジックの本当のすごさだと思います。

この話は、スコット・グウインの"教えられたこと"よりもかなり以前に投稿されたものです。世界中を見渡せば、素晴らしい話や素晴らしいマジシャンがたくさんいることがわかります。ところで話には続きがあります。最初の投稿は2002年9月5日の投稿でしたが、以下の投稿は2002年10月10日のものです。(加藤)

皆さん感想を投稿してくれて有り難う。その後残念なことに、心のせまい看護婦が看護スーパーバイザーに告げ口をして、私はマジックをやってはならない状態になって

しまいました。ボスはそのような気休めはこの病院には必要ないと言いました。ところが患者の方はマジックをやらなくなったことに不満を述べています。私にとっても患者にとっても、何かが足りない今日このごろです。

この2回目の投稿のあと、読者から同情の投稿、病院に対する文句などが殺到しました。そして月日は流れて2003年8月27日に3回目の投稿があり、この話はみごとにハッピーエンディングで終わることになります。(加藤)

グッドニュースです。私はただの看護師から看護スーパーバイザーに昇格いたしました。着るものはマジックに不都合な看護師の上っ張りから、ふつうのズボンとジャケットにかわりました。マジックの道具をいっぱい入れておけます。そして何よりも嬉しいことは、マジックをやっていいかどうか、私が決められる立場になったのです。空白の数ヶ月を埋めるべく、どんどんやりまくるつもりです。

思わず拍手をしたくなる話ですね。(加藤)

---

◆◆◆

## 列のできるマジシャン

= ゲオフリー・ウィリアムズ、“Magic Café”、2002年12月26日 =

---

◆◆◆

私は現在のようによく知られるまえから、パルドウッチレビテーションをやっていました。大学ではそのことでよく知られていました。私がアパートのルームメイトにやったときなどは、彼はすぐにお母さんに電話をかけていま見たことを話したほどの驚きようでした。そしてまたあるときは、夜も遅くなっていましたが、私の部屋から何室か離れた隣人にやって見せました。彼は興奮して、アパート中をまわって見たことを告げてまわりまわりました。

夜中の2時ごろになって、ドアにノックがあり、開けてみるとドアの外には大勢の人がいたのです。彼等は空中に浮くことができる男をぜひ見たいと思ったのです。すぐにルームメイトのラリーが私のマネージャー役を買って出てくれて、人々を一行に並ばせました。1回に2人ずつで、これほど1日に何回もレビテーションをやったことはありません。恐らくこれが私のマジックでいちばんの奇妙な体験だと思います。

---

## 教えられたこと

= スコット・グウィン、“Online Vision”、2003年2月号 =

---

私が読んだマジックに関するエッセーの中で、これほど胸を打ったものは他にありません。原著者のスコット・グウィン氏に許可を得て、ここに翻訳してお届けします。ここにはマジシャンがマジシャンである原点があります。(加藤)。

その電話は、私の気持ちを少しゆるめるようなものでありました。このような話はめったにあるものではありません。温暖なマイアミのベイエリアに行って、ある家族のパーティでマジックを演じてくれということです。電話の主の女性は、彼女の義理の兄が私のコラムの読者で、私なら彼女の息子の10歳の誕生日パーティに最適だと奨めたということです。そして彼女は最後に強烈な一撃を私に浴びせました。「私たちはこのパーティを息子にとって最高のものにしてあげたいの。なぜならこれが彼の最後の誕生日になりそうなので」と。うーん、まいった。

「あなたにいらしていただくには、いくらお支払いすればいいのかしら。兄があなた以外じゃだめだというので、他の方に頼むつもりはないんです」。私は言われた日が空いていたし、この家族の経済的負担を考えて、「私のショーを寄付させてください」と言いました。私がまるで100万ドルの寄付を申し出たのと同じぐらい、彼女は興奮して喜びました。パーティはそれほどの規模のものではなく、何人かの友人とその家族の集まりで、彼女の地域のクラブハウスで催されるとのことでした。

私が会場に着いたとき、私の胸はきゅっと引き締まったことを告白しなければなりません。その理由を書くこと自体につらいものがあります。会場の中央に小さな少年がいました。彼の名前はイアンです。彼は車椅子に座っていて、点滴のチューブが何本かつながっています。彼の頭には髪の毛がありません。まるでユーレイのように青ざめていて、あきらかに重い病気にかかっているようです。しかし彼の目には輝きがあって、その笑顔はその部屋を明るくしていました。彼のまわりには40人から50人の人がいて、その年齢層は赤ん坊から80代にわたっていました。

そこにいるすべての人がイアンの知り合いでしたが、ほとんどはお互いに知り合いではないように見えました。彼等の会話では、彼等がどのようにイアンと出会い、どんな思い出があるかということを話していましたが、イアンとの思い出話に涙を流す人もいました。イアンがいかに重い病気をわずらっていたとしても、彼等に対していかに愛情と喜びを与えていたかということが、彼等の話に共通していました。

そこにいたのは、マウント・ステーツ病院の看護婦たち、イアンが名誉会員となって

いるハーレイ・ダビッドソンクラブの会員たち、学友、親戚、友人、教会の人々などでしたが、すべての人々がこの小さな少年の勇気と精神に感銘を受けているようであり、たいへん感動的でした。

人々の交流がひとわり済んだあと、イアンのお母さんがイアンに言いました。「今日は特別なゲストがいらしてるのよ」。するとイアンは「わかっているよ」と言って、部屋のすべての人々を指さしたのです。私は一瞬めんくらい、お母さんも度を失いました。そしてお母さんはいいました。「そうね、皆さんあなたにとって特別なゲストに違いないけど、あなたが会ったことがない方で、特別にいらしているゲストがいるの。その方はリック叔父さんの知り合いで、マジシャンなの。彼の名前はグレート・スコットと言って、ほら、あちらの隅に立っている方よ」。

イアンの目は大きく開かれて、私の方を向きました。その顔には興奮と喜びが満ちていました。彼は私が本当にマジシャンかとたずね、彼のためにマジックをやってくれるのかとたずねました。私は「喜んでそういたしましょう」と答えて、そして私のマジックショーはスタートしたのです。

私は子供のころからずっとマジックで人々を楽しませてきましたが、こればかりはもっとも難しいものであり、同時に最高のものでありました。本当は彼のもとにひざまずいて、彼を抱きしめてなぐさめたり、彼のために祈りたい気持ちではありましたが、私は仕事を始めなければと思いたちました。私は彼の最後の誕生日に、私のマジックで彼に喜びを与える仕事を請け負ったのです。

そしてそのあとの40分間、私は悲しみの気持ちを抑えて、ひたすら笑顔で私のマジックショーを演じ続けました。(訳注:マジックとは、スコット・グウィンマジックのトレードマークです)。この少年を驚かせ、楽しませることにすべてのエネルギーを注ぎ込みました。彼が笑うとき、彼は彼のすべてを注いで笑いました。その笑いは伝染性が強く、彼が笑うときそれは部屋中に伝わり、笑いと拍手が響き渡りました。そして私が最後のトリックを終えたとき、彼の目はいままでよりもさらに輝き、笑顔は部屋いっぱい広がっていました。そして彼は言いました。「ありがとうグレート・スコット、今日はいままでで最高の誕生日だったよ」。

その言葉を言われた瞬間、いままで出演料をとってやってきたショーのすべてが意味のないものを感じられました。死にかけている一人の少年にとって、たとえ一瞬であったとしても、私が最高のマジシャンであり、彼のヒーローとなったのです。私はパーティーに出席させてもらったお礼を言って、また彼に会ってもっとマジックを見せたいと言いました。彼は「それはすごい！」と喜んでくれました。

それからしばらくたってから、私はイアンの叔父さんのリック・プレストン氏からメール

を受け取りました。パーティのあと彼はお祖母さんを空港まで送りましたが、お祖母さんは私が素晴らしい仕事をしたと言ってくれたそうです。そして同時に、悲しい知らせをも伝えてきました。あのパーティのちょうど2週間後に、イアンは8年間の闘病生活にピリオドを打ったとのことでした。それは苦しみのない最後だったそうです。

私は衝撃を受けて涙にくれましたが、そのことを書くのを恥ずかしいとは思いません。イアンのことは少ししか知りませんでしたが、彼は私の人生に大きなインパクトを与えてくれました。私は決してイアンを忘れません。彼は私がなぜマジックを仕事とするか、その原点をはっきりと教えてくれたのです。そのことはどんな高い出演料よりも、私にとって価値ある報酬でありました。

スコット・グウィン の “ 教えられたこと ” を読んで、彼がイアン少年にマジックを見せたことによって教えられたことと同じように、私は彼のエッセーから教えられたことがあります。それを私は “ Card Magic Monthly ” に書きました。それを再録いたします。

### エンタイナーとは

= 加藤英夫、 “ Card Magic Monthly ” 第 12 号、2003 年 3 月 15 日 =

マジシャンがマジシャンであるまえにエンタイナーであるべきである、という議論はすでに多くの方が書いてきました。しかしながら、今回のスコット・グウィン のエッセーを読んで、もういちどその点について復習しておいた方がよいと思いました。

多くのマジシャンは、マジックを人に見せるのが好きだから、人にマジックを見せます。プロマジシャンの中にも、その延長線上でプロになった人も少なくないと思います。それでは、なぜ多くのマジシャンは、人にマジックを見せるのが好きなのでしょう。

私の場合には、自分が考えたこと、とくに他人が考えたことがなかったことを人々に見せて、それがよい反応を得ることが面白くて、人にマジックを見せるのが好きです。人によっては、自分のアイデアであろうとなかろうと、とにかく観客の拍手を得られることが面白くてマジックをやる人もいます。さらには、マジックで相手を驚嘆させ、優越感を感じるのが面白いという人もいるに違いありません。

以上あげた3種類の動機は、すべてマジシャンの利益を出発点としたものです。そのようなマジシャンの利益にもとづく動機によって演じられたマジックは、ときとしてエンタテインメントとして望ましくないものを生み出す原因となる可能性があります。

“ Entertain ” を辞書で引くと、 “ もてなす ” という意味があります。マジシャンは観客をもてなす仕事をするのだと考えたら、自分が楽しいからマジックをやるという動機は、とりあえず念頭から捨て去る必要があります。もちろん自分が楽しんでやっているよう

に見えて、なおかつ観客をもてなすやり方はあります。たいていの場合、外見上はそのように見えた方がよいのでしょう。

私は、マジックを人に見せるということを、観客の利益の観点から考えることが、エンタテイナーとしてのマジシャンを考える出発点であるような気がしてなりません。

観客の利益とは、いったい何でしょうか。それはたんに楽しんでもらうということでしょうか。大きな驚き、腹をかかえる笑い、そのように客受けすることが、イコール観客に楽しんでもらうことを意味するのでしょうか。それらも確かにエンタテインするための要素かも知れませんが、それだけではないと思います。マジックが終わったときに、観客が楽しい時間、素晴らしい時間を過ごしたと感じ、その気持ちを抱きながら家に帰ってもらうことが、観客の利益であると私は思うのです。

英語にブルジョークというのがあります。私はこれを日本語で書く品性は持ち合わせていません。知らなかったら辞書を引いてください。ブルジョークによって大きな笑いを得ることはできます。私もこの種のジョークに強く反応する方です。しかしそのときは大笑いしたとしても、あとで私はむなしくなります。そんなジョークに笑った私と、そんなジョークで笑わそうとしたマジシャンに、私は無性に腹が立つのです。少なくとも私にとってブルジョークで観客を笑わすことは、観客をもてなすことではけしてありません。

ブルジョークではなくとも、それと同じぐらい馬鹿馬鹿しいことでありながら、客受けする現象や演技のやり方があります。いわゆる俗受けとでもいいでしょうか。それらが具体的にどのようなものであるかを書くのはやめておきましょう。考え方に大きな個人差があるからです。

さて、観客に楽しい時間、素晴らしい時間を過ごしたと感じさせたとしたら、それは観客の利益に立ったマジックであるとしましょう。しかし少なくともプロマジシャンに焦点を絞れば、まだ重要なことが欠落しています。マジシャンを雇った主催者の立場を考えなくてはならないという、恐らくもっとも重要な観点を見落としています。

またまた結論を述べてしまえば、主催者が素晴らしいエンタテイナーを呼んでくれたと観客に感じさせることが、プロとしての最終目標なのではないでしょうか。すなわち、素晴らしいマジックを見せること、素晴らしい時間を過ごしてもらうこと、それらをさらに超越して、そのひとときにその場所に、素晴らしいあなたがいたことを印象づけることが、エンタテイナーの究極の目的であると、私は強く思います。

ここでスコット・グウィンのエッセーを呼んだときの印象を思い出していただければ、私の伝えたいことをより明確に感じていただけるかも知れません。少なくとも私が今回



この文章を書く気持ちになったのは、グウィン氏のエッセーに胸を打たれたからです。たんに悲しくて美しい話に涙を流しただけでは、その涙はもったいないのです。スコットとイアンとの心の触れあいを、私たちの心の経験として取り込んでしまいましょう。そうすれば、二人からのプレゼントが、私たちの宝物になるのです。

---

私と交流のあったマジシャン  
= スチュワート・クレイマー、雑誌“MAGIC”、2003年6月 =

---

たいへん長い特集記事ですが、多くのマジシャンについて語られているので、全文を翻訳引用いたしました。（加藤）

### ダイ・バーノン

私の人生をずっと通して、バーノンを賞賛する声を聞き続けてきました。アンネマンの Jinx の時代から、マルホランドの Sphinx の時代まで、彼のことや彼の考えたカードマジックを読んできました。彼の何回かのレクチャーを崇拜の目で見、私はつねに偉大な人の前にいることを感じてきました。

最後にバーノンと会ったのは、ジョージ・ボストンや私の妻といっしょに、マジックキャッスルのバーでのことでした。バーノンは、カール・ジャーメインが、コインを紙でどのように包んだかを見せてくれました。バーノンが紙を開いたとき、コインは消えていました。私はただ紙の包み方を説明していただけだと思っていましたから、コインが消えたときには、びっくりしてしまいました。

### ユージン・ロウラント

ライセウム&チョウタンカ文化講演会や、舞台の数々で半世紀にわたって活躍したマジシャンです。マロが亡くなって以来、そしてジャーメインが引退を余儀なくされたとき、その分野ではロウラントがトップマジシャンとして残りました。ハンサムで衣装をきちっと身につけ、小規模なマジックとイリュージョンを混ぜて演じました。

1929年7月24日に、ペインズビルの大きなテントで彼の舞台を見ました。そのとき、私の叔父のハーバート・レオン・コープがロウラントを紹介してくれました。彼がマントをたなびかせて登場してくる様は忘れられません。まるでロビンフッドのようなスタイルでした。そして最後に、アメリカ国旗を舞台いっぱい埋め尽くす様は壮観でした。

### ハーバート・レオン・コープ

それは叔父のハーバートの誤ちでした。その間違いがなければ、私がいまこれを書いていることはありませんし、71年にもおよぶマジックのキャリアを経験することもありませんでした。彼は、私が7歳のときに、ハンカチの中のマッチ棒のトリックを見せてくれたのです。

ハーバートは、ライセウム & チョウタンカ時代のトップスターの1人でした。'ユーモラスレクチャー'と呼ばれていました。現代ならさしずめ'スタンドアップコメディアン'と呼ばれるような芸風でした。彼はマイクを必要としない、弁舌家でした。観客を泣かせたり、笑わせたり、自由自在に扱えました。

叔父のハーバートは、ユージン・ロウラントの親友であり、いくつかのマジックをいつもポケットに入れていて、うまく利用していました。私の家の近くに来たときは、いつも泊まっていき、私にナイフを飲み込む術、カードの下に集まる4枚のコイン、などを見せてくれたものです。いずれにしても、叔父がいてこそ、私はマジックの虫となったのです。

### カール・ジャーメイン

私のマジックにもっとも影響を与えたジャーメインについては、いままでも十分書いてきました。しかしそれらの本に書かれていないことがあります。彼はけしてカップ&ボールを演じませんでした。その理由は、カップ&ボールは彼のスタイルのマジック、すなわち、スタンドアップアクトの範疇に入らないというのです。彼の行うクローズアップマジックは、いっさいポケットに入る物ばかりを使いました。

また彼は、チャイナリングを演じませんでした。その理由は、彼が初めて見たリングリングは、まったく下手なマジシャンのもので、そのあと上手な人の演技を見ても、下手な演技が思い出されて、とてもやる気が起きなかったとのことでした。また彼は、演技において、けして火を使いませんでした。火は劇場ではたいへん危険なものであり、多くの人に不快感を与えるからです。彼は人間の体を切断するようなイリュージョンをやりませんでした。その理由はおそらく、デバントの例に影響されたのでしょう。

### カール・ロッシーニ

カール・ロッシーニ(ジョセフ・ローゼン)は、1855年ポーランドのロッツに生まれました。そして若いころにマジシャンになったとき、彼はロンドンでホーレス・ゴールドフィン、ルイス・ダベンポート、天一と親しくなりました。彼は小規模なマジックショーを構成し、ヨーロッパと南米で活躍しました。

アメリカのハリー・ローダーに見い出されたとき、彼は大ブレイクしました。ローダーはスコットランド出身の有名なコミック歌手であり、ボードビルではもっともギャラの高いエンターテイナーでした。B.F. キースプレイスで私が初めてカール・ロッシーニを見たとき、私は彼のサムタイを手伝うために、舞台上に上がりました。サムタイは私の重要なレパートリーともなりましたが、あくまでも私独自のやり方でやりました。(というのも、やり方を知らなかったからです)。50年間、私の得意芸となったのです。

そしてスウェーデン人を偉大なデンマーク人に変えるというイリュージョンは、忘れられないものです。1人の少女が、グレートデン犬に変化するのです。(訳注：デンとはデンマーク人のことをさすことがあるので、グレートデンが、偉大なデンマーク人というダジャレです)。ジャーメインはその犬について詩を書いたことがあります。それはいま、マルホランドコレクションの中に残っています。

私がロッシーニに会ったのは、ようやく1939年になってからでした。それはクリーブランドのホレンデンホテルのヴォーグルームでのことでした。ジャーメインと私は、ロッシーニを楽屋に訪ねました。この2人の偉大なマジシャンが、まるでバグパイプのようににぎやかにマジックの話をしていたのを見たのは、希少価値のある体験でした。2人がボディプル(引きネタ)のことを話し出したとき、私はおもわず聞き耳を立ててしまいました。

### ハーロウ・ホイト

ホイトは多作な著者であり、歴史家、演劇脚本家、コラムニスト、演劇と映画の評論家、そしてマジシャンでした。私と彼は、1930年のIBMコンベンションで会いました。彼はコンテストを担当し、司会もやっていました。私はチョークトークの部門に出場しましたが、この部門には私しか出なかったので、やる前から優勝はキミだよと、教えてくれました。しかし彼は演技時間に3分しかくれませんでした。そのときは、演技時間のことで口論になりましたが、そのあと彼はクリーブランドの彼の家に遊びに来いと誘ってくれました。そして2人の友情は花開きました。

私は、ホイトの膨大なライブラリーの本を読むことができることになりましたし、彼からショービジネスについて多くを教えてもらいました。そして偉大なアクターミュージシャン、作曲家や、そして彼の知っていたマジシャンの、マロ、サーストン、ブラックストーンなどについて話してくれました。ジャーメインを紹介してくれたのもホイトでした。

ヘイゼルと私が結婚したとき、ホイトのチョウタンカ湖の別荘に泊まらせてもらいました。そのあと、チョウタンカ文化講演で、いくつかの夏は、ホイトと私が組んでショーを行ったものです。これはホイトが舞台の上でショーを行った唯一の機会でした。彼はまったくマジックが下手で、観客の中に知り合いがいると、失敗するのを期待する野次を飛ばされたものです。

彼が80歳で引退したとき、彼はアメリカ演劇評論家の長老と呼ばれていました。彼は年をとってマジックへの興味を失うにしたがって、彼の道具や本を次第に私にくれるようになりました。それらはすべて、ケント州立大学のライブラリーに、'ホイト/クレイマーコレクション'として保管されています。

## ロバート・ハービン

ロバート・ハービンは、英国人にもっとも愛されたマジシャンでした。南アフリカ人で、本名はネッド・ウィリアムズといました。イギリスに移住してから国際的なマジシャンになりました。1950年にクリーブランドのスタラーホテルのテラスルームで、多くのオリジナルイリュージョンでショーを行いました。彼は積み重なったボウルの出現で、華々しくショーを締めくくりました。

その折りに、私は彼をジャーメインの家に連れていったのですが、何とそのときジャーメインの家にはもう1人のイギリス人のマジシャンがいて、その名前がオズワルド・ウィリアムズというのです。彼はこの機会に、芸名をロバート・ハービンに変えたのです。

## カーディニ

それは美しいマジシャンでした。彼のスライハンドは、何度も何度も私に衝撃を与えました。そして何10人もプロやアマチュアに真似されてきましたが、彼らは足下にもおよびませんでした。1954年の3月16日と17日に、カーディニと時間を過ごせたのは幸いでした。それは彼がクリーブランドのスタラーホテルのテラスルームに2週間にわたって出演した時のことでした。ときには散歩しながら、ときには庭のテラスで、彼がカーディニとして知られるまえのことを話してくれました。

そのうちのひとつの話は、彼がオーストラリアへの船旅の途中で起こりました。弱った鳥が船の手すりに止まりました。彼は部屋でこの鳥を介抱してやりました。鳥が元気になった数日後、彼はこの鳥を小さなサロンのショーで使うことにしました。彼が鳥を出現させた瞬間、観客のみならず、カーディニ自身もびつくりすることに、この鳥が1m以上もある羽を広げて、飛び立ったのです。

## ジョージ・ベイリー

皆さんは彼のことを、'きたないマジシャン'と呼ぶに違いありません。しかし彼は、ハリー・ローレインのまえの時代に、メモリーエキスパートとして大成功しました。私のショーをマネジメントした事務所に、1939年から1943年まで所属していたので、よく知っているのですが、彼のスケジュールはいつも埋まっていて、出演料はよだれが出るほどのものでした。

彼は客が入場するときに出迎えて、握手をしながら、1人1人の名前をきいていきます。あとで舞台の上から全員の名前を当てました。間違えた場合は1人につき1本のシャンパンを進呈すると宣言し演じ、いつも1人だけ間違えて、わざと笑いを誘いました。

## ジョン・マルホランド

マジック界の歴史家、コレクターとして偉大な存在です。とくに Sphinx の編集者として伝説に残っています。彼は社交界でのパフォーマーとして、高いギャラを稼いでいました。私がマルホランドの演技をクリーブランド大学クラブで見たとき、ずいぶんスローでユーモアに欠ける演技だと思いましたが、いっしょにいたジャーメインが言いました。「ずいぶん学者気取りだけど、彼はカルチャーファンがお客さんだからね」と。

私はニューヨークの Sphinx のオフィスを訪ね、彼と彼の秘書のドロシー・ウルフェとおしゃべりをしましたし、コンベンションでもよく話をしましたが、彼の話し方は上品なのですが、私に対して馬鹿丁寧に答えるのです。いずれにしても、彼は私が投稿したものを、よく Sphinx で取り上げてくれました。

## E.J. ムーア

ボードビル全盛の時代(1903-1913年)に大活躍したマジシャンです。そして初期の IBM コンベンションで際だった存在でありました。彼が麦藁のセイラー帽をかぶって、司会者というよりもむしろ、呼び込み人として大声をあげていたのをよくおぼえています。'Talking Trickster'(おしゃべりトリックスター)のキャッチフレーズのもと、コメディアクトでは No.1 でした。

彼のキャリアのある時期において、彼が'仏陀の涙'を取り入れたとき、彼はコメディからまじめなマジックへと飛躍をとげました。大きな白い豆のような物を飲み込んでから、それをピンセットで目から取り出すのです。それは気持ちの悪いものでしたが、ものすごい光景でした。彼はまずその演技のクローズアップした映像で見せ、それから実際にやって見せます。豆が彼の目から出てくるのは間違ありません。

## ポール・フレミング

ポール・フレミングは、'ドクター・ポール・フレミング'として、アメリカのフーズフーにもなった人です。スワースムーア大学の経済学の教授であり、その分野の著者であり、そして出版社でもありました。彼はかつてのカール・ジャーメインのアシスタントとしてもよく知られています。私は彼がアシスタントをしていたころの、ジャーメインのアクトを 2 回見る機会がありました。1939 年のオハイオ州、レークサイドのフーバーシアターでのことでした。フレミングのスタイルもジャーメインに似ていましたが、しゃべり方がいかにも学者風で、ウイットのあるジャーメインとは対照的でした。

フレミングはそののち、自分のショーを組み立てて、何 100 という大学とかプライベートスクールあてに売り込みました。東部から中西部にかけてショーを行いました。

## ジーン・デン・ジェン

このマジシャンについては、多くを書くことができます。私はマジシャンとしての彼を賞賛しますが、個人としては嫌いでした。その話は、1930年のフォートウェインのIBM大会で、私が彼のアシスタントをしたときにさかのぼります。練習するつもりでクリーブランドハイツの彼の家に行ったのです。しかし彼は練習することなく、ただ指示の紙切れを1枚くれただけです。ショーは案の定うまくいかなくて、ショーのあとに観客からひどくののしられました。私は、デン・ジェンの奥さんが隠れたアスローイリュージョンの台を袖に片づけるとき、初めてこのイリュージョンの仕掛けを知ったぐらいです。あとで、デン・ジェンは、悪評の原因を、「あの新米のアシスタントのせいだ」と言ったとのことでした。

デン・ジェンはオランダに生まれ、彼のアクセントゆえに、観客はフランス人だと思われました。のちに彼はフロリダで、'オランビジュアル'の会社を成功させました。

## エディ・タロック

トレードショーマジシャンの'大親父'として知られています。この分野で最初に成功したマジシャンではないとしても、もっとも成功したマジシャンであることに間違いはありません。彼は1回のショーで、18種類のカードマジックを演じます。ひとつひとつから最大の効果を引き出します。彼のフォースとトップチェンジは、抜き出る者がいないほどです。彼のひとつの特長は、彼の声です。マイクをまったく必要としませんでした。コンベンションホールに彼の声と笑い声が響き渡ったものです。彼は、私をトレードショーエージェントのボブ・スノーデル&アソシエイトに紹介してくれました。そのおかげで、私もアソシエイトの一員となることができたのです。

## バート・アラートン

彼の本名は、バート・アラートン・グスタフソンでした。何と45歳のときにターベルコースのセットを入手してからマジックに興味を持ったそうです。サンオイルの重役という裕福な地位を捨てて、1939年に彼はフルタイムマジシャンとなりました。私は何年もわたり、何回も彼と会いました。

1950年代のシカゴのSAMのコンベンションで、モリソンホテルのロビーで、ヘラルド紙の貴社がそわそわしているのを見つけました。私は彼に2,3のマジックをやって見せ、SAMがなんたるものかを教えてやりました。そしてバーでマジシャンに囲まれていたアラートンを紹介しました。アラートンはすぐにリポーターに注目し、私を無視しました。それから1年後に、マット・シューリーンのレストランに、ドン・アランのマジックを見に行ったとき、アラートンが偶然私の隣りにすわりましたが、何と1年まえのり

ポーターの件を謝ったのです。

### クーダ・ボックス

パキスタン人のクーダ・ボックスは、スタラーホテルのテラスルームで'Xレイアクト'をやるためにクリーブランドにやってきました。スタラーの重役は、それと同じ2週間、私の'指先で見る'というアクトも組み入れようとしていました。ところが、ミュージックコーポレーションアメリカがホテルチェーンへの権利を握っていたため、私は出演できなくなりました。しかも悪いことに、ボックスがウェスタンリザーブ大学の教授相手に、彼の超能力が本物だとチャレンジしたために、教授たちとジャーナリストがこぞってボックスバッシングを行いました。つぎの日のクリーブランドプレイン紙には、ボックスが鼻の下から懸命に外を見ようとしていた話がすっぱ抜かれていました。

### オキト

オキトは、代々マジシャンを受け継いできた家計の6代目か7代目です。彼は舞台のみならず、クローズアップでもすべての面でアーティストでした。オリジナルな道具の繊細な作り手でもあり、半世紀にわたって成功をおさめました。彼はゆっくりとスムーズに演技し、今日のマジシャンのように、自分のすごさを誇示するようなことはありませんでした。私は、彼の布から水鉢の出現を忘れることができません。まったく不可能に見えました。私にとって嬉しかったのは、彼がアンコールのために舞台に再登場したとき、客席にいる私を見つけて、私のサムタイを誉めてくれた時のことです。隣りにいたジェイ・マーシャルが言いました。「ほら、シカゴに来た甲斐があったでしょう」と。

### イゴール・キオ

有名なロシアのイリュージョニスト。1967年にアメリカを訪れました。モスクワサーカスの後半を彼が演じたのです。その年の11月、フランシスとジェイのマーシャル夫妻が私の家ですごしたとき、クリーブランドアリーナのキオのショーの最前列のチケットが手に入りました。ボブ・ネルソンとマイク・オダウドもいっしょでした。私たちをもっとも驚かせたのは、1頭の馬が馬車を引いてリング中央に登場し、2人の女性と御者が馬車を降りたあと、3人は立ち去り、キオが馬車に大きな布をかけます。そして布をどけたとき、元の3人が馬車に座っているのです。さすがに社会主義国家が運営するサーカスです。さもないければ、3組の双子など調達できるわけがありません。

### ジョセフ・ダニンジャー

ダニンジャーは、すべての時代の中で、もっとも有名なメンタリストといえるでしょう。ケラーの時代にマジックを始めた彼は、初めはフルイブニングショーをやっていました



が、のちにマインドリーディングに特化し、1940年代のラジオネットワークにおいて、一般大衆に知られるようになりました。

1943年11月21日、カーターホテルからラジオ放送された番組に立ち会いましたが、そのときのスポンサーがウィリアムズペイント会社であり、私はライバルのアルコペイント会社の宣伝部長だったので、招待を受けたのです。放送のまえのウォームアップセッションにおいて、彼はメンタルカードマジックを2種類やりました。そのうちのひとつは、フォーシングデッキを使うものでした。彼の迫力あるパーソナリティは、畏敬の念を感じました。私はずうずうしくも、放送のあと、関係者の列の中に混じり、かの偉大なメンタリストと握手をしたのでした。

### ラッセル・スワン

彼は私の妻のヘイゼルの一生のひいきのマジシャンでした。1930年代半ばから1950年代の初めまで、彼のソフィスティケイテッドなコメディマジックは、アメリカとイギリスの超高級ホテルのナイトクラブで脚光を浴びました。彼は伝統的なマジシャンのパロディをやり、客扱いにおいても、笑いを生み出しました。彼は1人の客が耳が悪いかのように思わせる演技で、連続的な笑いを生んだパイオニアです。彼は客のそばにいながら、大きな声で「ちょっとしたカードマジックをやりますよ」とどなったりするのです。

彼がクリーブランドに来ると私たちはいつも見に行きましたし、ときどき彼は私たちをホテルのスイートルームに招待してくれました。あるとき、5歳の娘をともなって訪れたとき、ラッセルは私たちをリビングにおいて、他の部屋で着替えをしていました。そのとき娘はスワンのアシスタントの人形をいじっていました。そして私たちはスワンのショーについて話をしました。スワンが着替えて出てくると、「さあ、皆さんが私のショーをどのように言っているか聞いてみましょう」と言いました。驚いたことに、彼は私たちの会話をワイヤーテープに録音していたのです。幸いなことに、私たちのしゃべったことは、ポジティブなことばかりでしたが、ちょっと冷や汗をかかされました。

### J.B. ボボ

ボボと私はほとんど同じの年齢でした。違ったのは私が大きな荷物と遠距離の旅が必要な仕事から足を洗ったとき、まだボボは仕事をしていたことです。彼と妻のリリアンは、スクールショーを50年にもわたって続けたのです。彼はスクールアセンブリービューローを通して仕事を始めましたが、のちに直接仕事をとる方が利益があがることに気づきました。仕事はきつくなったようですが、彼はそれを続けました。

J.B. とリリアンは、私の家にランチにやってきました。彼にきてもらったのは、私の

プリテンドルーティンの中の技法を覚えてもらうためでした。それはボボの“Modern Coin Magic”の初版にのりました。ボボはまた、彼の“Watch His One”の中のいくつかのマジックも見せてくれました。ボボがカラーチェンジングダイスを始めたとき、ヘイゼルは急に心配顔になりました。私たちは新しいダイニングテーブルを買ったばかりだったのです。でも傷はつきませんでした。私としては、傷がついたとしても、それはボボが来訪してくれた記念として、気にはしなかったでしょう。

### スタンレイ・ジャックス

スタンレイ・ジャックスは、ある出来事を通して、マジック界のスーパースターだと言えるでしょう。最初の交流は、1940年代の手紙の交換でした。その当時は、私たちは2人とも、アンネマンのJinxの投稿者でした。1903年にドイツに生まれ、その後ヒトラーが力をふるうようになったころ、スイスに移住しました。彼は1946年にアメリカに来るまで、ホテルとサパークラブでクローズアップマジシャンとして仕事をしました。

私が彼と会ったのは、クリーブランドのハーマン・パーチナー・アルパインビレッジに出演した時のことでした。そのときにはすでにメンタリズムに転向していて、一般のマジックはあきらめていました。彼の呼び物は、'贋作アクト'でした。彼は目隠しした状態で、客のサインを正面から、反対から、横からと、正確に模写するのです。

彼とは私のクリーブランドの家でも、彼のニューヨークの家でも、よくセッションしました。クローズアップマジシャンとして演じていたときの演目を親切に教えてくれたものです。私はあるとき彼をカール・ジャーメインと引き合わせました。私たちはレイクウッドパークでピクニックをしましたが、ずっとマジックの話ばかりしていました。ジャーメインはジャックスを気に入り、ときどきドイツ語で話しました。ジャックスのドイツ語なまりの英語は、彼のオリジナリティのあるマジックとあいまって、プレゼンテーションを生き生きとさせたものでした。

### ジョージ・ジェイソン

ジョージ・ジェイソンは、私が見ることができた中でも、もっともおかしいマジシャンでした。彼はたぐいまれなユーモアの持ち主で、トウモロコシを純粋な金に変えることのできるほどの人でした。ロシアに生まれ育ち、波瀾万丈の人生を送りました。コンサートピアニストの先駆者でした。彼はカナダに入国し、それからアメリカにやってきました。コメディアン／ミュージシャンとして成功の道を歩きました。ビクター・ホルグを彷彿とさせるものでした。私は彼と1958年のバッファローでのIBMコンベンションで会いました。彼はその大会で、バックグラウンドミュージックの一部を演奏しました。彼は1959年に放浪タイプの芸人がたどるように、1人でこの世を去りました。ホテルの一室でのことでした。

## ドック・ニクソン

このボードビルリアンの一生は、まるで恐怖小説を地でいったようなものです。彼が優れたマジシャンであったことは疑う余地がありませんが、他の誰よりも、別名 (a.k.a.) を持っていました。ニーク・エクストン、リング・チャン・ユーエン、オキト・ニクソン、チャナマールなどです。ひとつのアク트가うまくいかなかったり、法律もしくは経済的困難に陥ったとき、ニクソンはいつも違う名前が登場したのです。彼がボードビルに出演することになったとき、彼の家をセオ・バンバーグの 'オキト' の名前を使う権利と交換しました。そして彼も 'アヒルはどこに行ったの' を演じました。

私と彼との交流の始まりは、彼の道具をいくつか買ったことです。'ウサギがヒヨコに変化する箱'、'金魚鉢のスタックの出現'、'サッカータイプの鳩消し' などです。これらの道具はすべて、私の 1947 年のチャン・ウィン・ショーに使われました。

ドック・ニクソンは、マジック界からかなり早期に姿を消しました。ニクソンに関する最後の情報は、セントルイスの有名なマジックディーラー、ウィル・リンドホーストから聞いたものです。ニクソンは、ある宗教団体に入ったとのこと。駅で黒ずくめのニクソンを見かけ、リンドホーストは駆け寄って話かけようとしたのですが、知らない振りを通したとのこと。そのあと、あのマジック界のスター、ドック・ニクソンの行方を知る人はいないようです。

## バート・イーズレイ

彼は、ホテルのクラブのアクト、'Tipsitry Trickster'(ほろ酔いマジシャン)のアクトで人気を博しました。彼のやっているマジックはまともなものなのですが、そのマジックが酔っている彼自身を驚かせます。彼はある時点で、体を斜めに倒す、バーレスクのギャグをやります。白いスカーフを取ってテーブルに投げると、色が変わります。彼は帽子からバネ入りのウサギを取り出したあと、本物のウサギを 2 羽出します。私はやり方がわからなくて、ショーのあとに楽屋を訪ね、ネタを売ってくれないかと言いました。彼は「買うといったのはキミが初めてだよ」と言って、親切にも帽子の仕掛けを見せてくれました。

## ハーディー

私たちは、'ダッシュ'とも呼んでいましたが、彼の兄弟のハリー・フーディニの生涯で重要な役割を演じた人です。1926 年以降、彼はフーディニの名前を利用して、高級なボードビルに出演しました。しかし彼には、フーディニのあでやかさはありませんでした。

第二次世界大戦の間、私がハーバードの海軍コミュニケーションスクールに通っていたころ、ボストンでオルセン&ジョンソンのコメディチームが'ヘルザホッピン'というショーで、ハーディンを主演に据えました。私はチック・ジョンソンの知り合いでしたので、そのショーのチケットを送ってもらい、同僚を連れて見に行きました。私たちの席は最前列で、美しいコーラスガールとしょっちゅう目があいました。ショーのあと、楽屋をたずねると、ハーディンに紹介されましたが、そのとき彼女にウィンクを送り、デートに誘い出すのに成功しました。

私は彼らをケンブリッジのハスティプディングクラブに招待しました。その夜きたのは、彼女とチック・ジョンソンでした。彼女の腕をとって海軍クラブを案内したときは、私は得意満面でした。でもチック・ジョンソンはいつときも私と彼女を二人だけにしてくれませんでした。そして私たちのパーティは、ジョンソンと彼女がタクシーで立ち去ったときに終わりました。私はただダシに使われたただけだったのです。私は「しまった」と思いました。もっとハーディンと親しくなる方を選んでおけばよかったと。

### アルバート・ジャックス

クリーブランドの若き青年が、ハリー・ケラーとカール・ジャーメインに魅せられて、マーティンカの道具を買い集め、ひとつのアクトを組み立てました。彼はすぐにクラブでの仕事を確立し、有名なデパート、ハル・ブロスに雇われるまでになりました。彼はフリーランスマジシャンとしての経営感覚を身につけていましたが、ある日ハル会長が彼に誘いをかけました。彼がハル・ブロスだけのために働くなら、マジシャンとして稼いでいたのと同額のサラリーを払うと言ったのです。そして彼は、ハル・ブロスの重役になったのです。

クリーブランドハイツで、通り何本かしか離れていなかった私とアルバートは、彼が私にインタビューしたいということで、初めて会うことになりました。彼は若かったころの私のマジックが印象に残っていたそうです。そして彼がもう使わなくなったトランクいっぱいの道具を、たったの75ドルでゆずってくれるというのです。その中には、'ジャーメインの時計'、'マーティンカの魚トリック'、'消えるランプ'、'ケラーのフラワープロダクション'、'ジャーメインのダイビングダック'、'オベディエントボール'などがありました。

### ジョン・ブース

彼は1912年に生まれました。私の知っている中で、もっとも傑出した人でした。そして誰よりも長く友人であった人です。彼は、トップナイトクラブアーティスト、著述家、写真家、アメリカでよく知られた牧師、著名な旅行家、写真家でありました。彼とは頻繁に手紙を交わしたものです。

私たち2人は、クリーブランドハイツ高校で同じクラスの少年マジシャンでした。私たちは、彼の先生であるウィリアム・アームストロングの教えと、私の先生のアルバート・シャックスの教えを共有しました。

あるとき、私はジョンの伝記を書こうと思い立ち、彼にもその気がありましたが、いざ彼の生涯を詳しく調べ始めたとき、彼の生き方の深さ、彼の達観したものの高さを知ったとき、とても私の力の及ぶものではないと悟りました。

### ジョン・グリンド

ジョン・グリンドは、彼の妻ミニー、彼の息子のレイの3人で、低い階層のボードビルで苦労を続けたマジシャンです。最後はグリンド婦人に「Magic or Minii」（マジックがミニーのどちらかにして）とせまられ、マジシャンをあきらめることになりました。そして彼は高利貸しになり、それ以外にも、小売業、請負業など、色々なビジネスに手を染めました。

ジョンが71歳で引退したとき、またマジックの世界へ完全復帰したのです。それから15年間というものを、クラブ出演、カソリックのチャリティショーで評判をとり、古き良き時代のボードビルスターとして名を上げました。彼は地域のソロバキア人のヒーローとなりました。IBMとSAMでも脚光を浴び、クリーブランドマジシャンの長老に選ばれました。

### ハリー・ブラックストーン

彼は、威風堂々とした姿と、響き渡る声を持っていました。私にとってブラックストーンこそ、偉大なマジシャンを具現化したシンボルでした。あるとき、私は彼を私の番組である「ジャスト・フォー・キッズ」に出してもらいました。放送のあとスタジオから出たとき、イースト6番街は、両側に人が列を作っていました。その列は、毎年行われるクリーブランドプレスの主催するクリスマスのパレードを待っているものでした。ブラックストーンはすぐに帽子を手に取り、両側の人々に手を振りながら通りの中央を歩き始めました。私と彼のマネージャーは、彼のあとに続き、「今夜、ブラックストーンがハンナ劇場に出演します」とさげび続けました。

### ダンテ

ダンテは、1941年にハンナ劇場に1週間出演いたしました。マジシャン仲間が彼のためにショーのあとのディナーを催したとき、私はモーヨー・ミラーの隣りに座りました。ショーのトップアシスタントです。彼女はたいへん美しく上品で、私は彼女以外が目に入りませんでした。私のどもりながらのリクエストに対して、彼女はダンテとのインタ

ビューを取り持ってくれました。

約束の日にショーの終わったあとの舞台裏で、とんでもない光景を目撃することになりました。ダンテが AGVA のエージェントと口論しているのです。そのエージェントは、アシスタントとトラブルを起こしたのです。ダンテはエージェントを殴りました。エージェントは倒れましたが、それでもダンテの怒りはおさまりませんでした。ことが静まったあと、私は楽屋でダンテの隣りに座りましたが、ダンテはタンブラーいっぱいのスコッチをあおっていました。私は、自分自身の AGVA(アメリカン・ギルド・オブ・バラエティ・アーティスト)とのトラブルを話してきかせました。このことが、私たちとの絆の始まりになったようです。

私は、私のマジックの夢について語りました。すると彼は、つぎのアドバイスをしてくれました。

よいマネージャーを持つこと。たとえ 50% を彼に払うことになっても。アシスタントとして、若い夫婦を雇うこと。女性は美しく、男性は頑丈な体の持ち主であること。イリュージョンは数をおさえ、運送コストをおさえること。

この最後のアドバイスは私を驚かせました。なぜなら、ダンテはいつもスケールの大きなショーを演じていたのですから。

### アルバート・ゴツシュマン

アルバート・ゴツシュマンは、ニューヨークでパン屋を営んでいましたが、最後には、世界的に有名なスライハンドマジシャンとして、名声も、経済的にも成功をおさめました。彼の 'シェーカーの下のコイン' やスポンジボールを見たことのある人は、彼のクリエイティブなマジックを認めることでしょう。しかしながら、彼は振る舞いや着る物のだらしなさ、不作法さを直そうとはしませんでした。あるトレードショーでのトラブルは、彼の欠点を物語っています。

エディ・タロック、バド・ディートリヒ、マイク・ロジャース、アルバート・ゴツシュマン、そして私が同じトレードショーで仕事をしていました。私たちはいっしょにランチを取ることにしました。参加者が食事を終わったあとの時間で、ひとつのテーブルに座りました。ところがウェイトレスが見あたりません。いくら待ってもどうにもならないので、ブースに戻ろうということになりました。ところがゴツシュマンは、まだ片付けられていないテーブルに行き、残っているパンや肉やピクルスを集め、彼のランチを作ったのです。彼がテーブルに戻ったとき、私たちはブースに戻っていました。

## ジェイ・マーシャル

世界で人気マジシャンコンテストをやったとしたら、ジェイは間違いなく1位になるでしょう。彼との交流の日々の中に、いくつかの思い出があります。ジェイがクリーブランドを訪れたとき、私の来るまで町を走っていたとき、ガソリンがなくなってしまう、2人でガソリンスタンドまで車を押していったことがあります。彼を連れてジャーメインを養老院に見舞ったこと。私の書齋でキオのポスターを見ながら、キオのイリュージョンの解剖を試みたことなどです。恐らく多くのマジシャンが、それぞれのジェイとの思い出をお持ちのことでしょう。誰もが彼との体験に誇りを持っているはずです。

## ラルフ・エマーソン・パウエル

彼は私が会った最初のマジシャンであり、彼の生涯としてではありませんが、多くを教えられたマジシャンです。すなわち、彼が演じた下手なマジックから学んだのです。彼はたくさんの道具を持っていました。しかし演技はまるでアマチュア丸出しでした。彼は今日でも売られている、'Stung, Stung Again' というマジックの考案者です。

私はあるコンベンションで、パウエルが実用的なジョークを見せたときのことをおぼえています。それはパウエルが長い演技を終わったとき、バックカーテンが上がり、ジョー・バーグとジャック・グウィンが梯子を持って出てきました。もう1人がバケツを持って同行します。パウエルは背後で何が起きているかを知らず、観客が彼のセリフに笑っているのだと勘違いして、自分のプレゼンテーションが受けたと思いこみました。

## アル・サル

彼はトレドの請負人でしたが、シャドウアートやカードやシガレットマニピュレーションをやりました。私は、彼に質問したことがあります。普段タバコを吸わないマジシャンが、タバコのマジックをやってもよいのでしょうかと。彼は馬鹿にしたように私の顔を見て、「いかにも普段タバコを吸っているように扱えばかまわんだらう」と言いました。その当時は、タバコを出現させられないようなマジシャンは、買い手がつきにくかったのです。

## ウォルター・ギブソン

マジックの著者としてもっとも多作家であることに加え、彼はブラックストーンの広報担当として、ツアーに同行していました。ブラックストーンがハンナ劇場で公演したとき、ブラックストーンとギブソンは、クリーブランドマジッククラブのアルバート・ジャックスの家に招かれました。

この2人が到着するまえに、私はギブソンの考案した 'Phoenix' というマジックをやっ

て見せました。連中はそのマジックを気に入り、ギブソンが到着したとき、ギブソンにもやって見せろというのです。ブラックストーンは、部屋の向こうでファンに囲まれていました。私は考案した本人に見せるのは失礼だと言いましたが、連中はやれと言ってききません。ギブソンも紳士ですから、ぜひやってくれと言いました。いざ私がやろうとしたそのとき、ブラックストーンが「みんなで写真を撮ろう」と声をかけました。するとどうでしょう。そこに残ったのは私とギブソンだけで、他の連中は全員部屋の向こうの方に行ってしまいました。その晩、ギブソンと目があうたびに、お互いにニヤニヤしたものです。

### ラス・ウォルシュ

彼は鉄道会社の重役でした。アマチュアマジシャンでしたが、ウォルシュのバニッシングケーンとアピアリングケーンの製造者として有名でした。ずっと昔の土曜の午後、私と彼は東6番街を歩いていたときに、彼が言いました。「私はこの町が好きじゃないんだ。鞍馬だらけで、まるで道がなくなっちゃったみたいで」。彼は続けました。「でもカール・ジャーメインを生んだことは別にしてね」。

### ハーラン・ターベル

1931年に、私がハイラムカレッジの新入生だったとき、掲示板にその年のレクチャーの一覧表が張り出されました。私はハーラン・ターベルが来る日を知り、その日レクチャーを駅から大学まで釣れてくる役を買って出ました。私はトラックをレンタルして、雪の降る中、ターベルを待ちましたが、彼が到着したとき、彼の荷物は両手にひとつずつ持てる大きさのカバンだけでした。彼のマジックショーはそれらの中に入るぐらいだったのです。

私は、彼の演技に興奮し、とくにフィンガーチップを使うマジックは初めてでした。レクチャーのあと、私は彼をまた駅まで送りましたが、別れ際に彼が、「何かききたいことがありますか」と言いました。私はすぐに、ブラインドホールダクトがやりたいと言いました。すると彼は驚いて、「ただちょっと演技すればいいだけのことですが」と言いながらも、やり方を詳しく教えてくれました。そのマジックは、そのときから、私が1989年に引退するまで、私の呼び物のひとつとなりました。



---

◆◆◆

カードマジックは価値のあるものでしょうか  
= 加藤英夫、“Card Magic Monthly” 第 21 号、2003 年 12 月 15 日 =

---

◆◆◆

マジックカフェに、カードマジックに行き詰まった若者が、カードマジックを投げ出そうとした心境で投稿してきたことから、有意義な会話がなされました。

投稿者：Seismic、2003 年 3 月 26 日

私は今日、カードマジックを学ぶことが価値のあることであるかどうか迷っています。最近コインマジックを始めて、コインマジックの方がバラエティに富んでいると思います。カードマジックは行われ過ぎましたし、古くさいと感じています。

たぶん私はカードマジックで上達しなかったのかも知れませんが、いままでこのようなことを深く考えていなかったからかも知れません。いずれにしても、コインマジックの方が私にとっても、観客にとっても魅力的であるように思えるのです。カードマジックには、やらなければならないことが多過ぎます。とくに選ばれたカードを当てると、何でこれほどまでに多くのやり方を学ぶ必要があるのでしょうか。

投稿者：Denny Corby、2003 年 3 月 26 日

あなたはカードマジックではやらなければならないことが多いと述べて、それらやることから逃避しているのではありませんか。もしあなたがマジックと取り組んでいて、やらなければならないことをやりたくないのなら、どうぞカードマジックに別れを告げてください。

投稿者：Garret Nelson、2003 年 3 月 26 日

あなたはカード当てをたくさん学びすぎたようですね。カードマジックにはもっとたくさんの現象がありますよ。コインマジックと同じようにフラッシュなトリックもあります。たぶんコインマジックはあなたにとって新しい分野なので、新鮮さを感じているに過ぎないと思います。まあ少しカードマジックから離れるのもよいでしょう。他のマジックについて勉強したあと、必ずやカードマジックに戻ってくるのを信じています。

投稿者：Stanyon、2003 年 3 月 26 日

Seismic さんが、“カードマジックにはやらなければならないことが多い”と言ったことに、私も同感です。彼の問題の根元がそこにあると思います。

投稿者：Maestro、2003年3月27日

Seismicさんは、カード当てが多いことを指摘していましたが、コインマジックにだって同じようなことが言えますよ。それはコインが消えて他の場所から出てくるという現象です。彼がコインマジックをやったとしても、同じような悩みにぶつかるに違いありません。

投稿者：thecardman、2003年3月27日

もしもやるが多すぎるということが、練習がたいへんだという意味であるのなら、ダイ・バーノンのつぎの言葉を進呈いたしましょう。

“練習するのが楽しくないという人は、マジックをやめて他の趣味を始めなさい”。

投稿者：加藤英夫、2003年9月22日

Seismicが私の息子だったら、つぎのような2つのまったく異なった忠告をするでしょう。

1. 山の頂上に達していないのに、山を下りてはいけない。
2. 興味を持ったことはどんどんやりなさい。人生では色々なことを学ぶべきだ。

Seismicさんは私の息子ではありませんから、「好きなようにやったら」と申しあげておきましょう。

追伸

私自身は、好きだった色々なことを投げ出してきました。ゴルフもやめました。高いワインを買う趣味も捨てました。バックギャモンからも去りました。最近ではあれだけ熱中していたボウリングからさえも遠ざかっています。

しかし私の場合には、必ずあるレベルまで達したあとで別れを告げています。バックギャモンでは日本選手権で優勝したことがあります。いちどに高いワインを300本貯蔵していたこともあります。ボウリングのアベレージは200でしたし、パーフェクトも試合で4回達成しています。そしてもっとも鮮烈な決別は、カードマジック以外のマジックと決別したことです。

カードマジック以外のマジックと手を切ったのは、他とは異なる理由があります。カードマジックがもっとも奥が深いものであり、このあとの私の人生をかけるのに値するものだと思信したからです。

投稿者：Joe Heckman, 2003 年 9 月 22 日

このスレッドを昼休みに読むんじゃなかったですよ。これから仕事に戻らなくちゃいけないのに、ついのもり込んでしまいました。加藤さん、あなたのような方とはぜひビールでも飲みながら、マジックについて話をしたいものです。それともワインにしましょうか。

とにかくカードマジックにはバリエーションが多くあります。Seismic さん、それらを全部おぼえようなどということはせずに、自分に合ったものを見つけたら、それらで十分エンタテインできるまで練習してください。けしてカードマジックに燃え尽きないことを祈っています。

投稿者：加藤英夫、2003 年 9 月 22 日

Joe さんがいわれたことで確信が持てました。Seismic さんの悩みは、インターネット時代の情報過多が大きな原因なのでしょう。私はビギナーにダローの EOCS は薦めません。あれをビギナーが見たら、Seismic と同じような気持ちを持つかも知れません。たぶんビギナーがカードマジックを平穩に楽しむには、多すぎる情報を得ず、ひとつひとつのマジックを確実にマスターしていくことだと思います。

投稿者：Pete Biro, 2003 年 9 月 22 日

加藤さんのおっしゃる通り、いちどにひとつのステップをしっかりと踏みしめていくことですね。

というわけで、ピート・バイロ氏が締めくくってくれました。後日談としては、その後 Seismic さんは元気を取り戻して、カードマジックのフォーラムに積極的に投稿しています。めでたし、めでたし。

---

◆◆◆

## ワールドマジックセミナーに出席して

= 加藤英夫、"カードマジックショーアップ講座"、2004年1月16日 =

---

◆◆◆

昨日ラスベガスのワールドマジックセミナーから帰ってきました。今回は私の友好関係が少し広がっていたことと、マリック氏の友好関係のおかげで、多くの素晴らしいマジシャンと交流できました。

まず初めに、Magic Cafe を通して私の存在を知ったリー・アッシャーが、私にカードマジックを見せたいと言ってきました。彼が最近考えた新しい技法にもとづくカードマジックをつぎからつぎへと見せてくれました。発表は半年後ぐらいになるので、まだ詳しく紹介するわけにはいきませんが、ひとつだけ現象を書いておきます。

彼はデッキを赤と黒を交互にします。交互になっているのを広げてよく見せ、デッキを閉じます。間髪をいれずにカードを広げると、デッキは赤と黒に分離しています。そしてまたデッキを閉じます。そしてすぐに彼は私にデッキを渡しました。私がデッキを広げると、カードはすべて赤と黒が交互になっていました。ギャフカードはいっさい使っていません。

彼のカードマジックを目の前で見て、決定的に他のカードマジシャンと異なる点を見出しました。彼のカードマジックは、他のマジシャンよりも上手だということにとどまりません。彼のカードマジックには、いっさい怪しさのかけらが感じられないのです。このことは、最終日にジェオフ・ラタという、もう1人の傑出したマジシャンのカードマジックを目の前で見て、はっきりと確認できました。

リー・アッシャーのカードマジックについていくら私が賞賛しても意味がないので、これ以上は書きません。彼のマジックは、レクチャーなどで離れて見たのでは、そのすごさがわからないと思います。彼のマジックは目の前で見てのみ、その真価がわかるのです。さすがのマリックさんも、「こんなカードマジックは見たことがない」と感動していました。

つぎに私が驚嘆させられたのは、メキシコ出身のプロ中のプロ、アーマンド・ルセーロの'マトリックス'です。日本では'マトリックス'と発音していますが、あちらでは'メイトリックス'と発音しています。私が'マトリックス'と発音したら通じませんでした。ルセーロのこのマジックもまた、私がここで説明しても意味がありません。一言でいえば、今まで見たこのマジックは、たとえデヴィッド・ロスであろうとシュート・オガワであろうとも、だいたいその瞬間瞬間に何をやっているか想像できたのですが、ルセーロのこのマジックは、いっさいフォローできませんでした。何よりもアセンブルした直後

にディスアSEMBルする瞬間技が目を疑うものでした。

マーク・ステデュカティとバーで出会いました。彼はテンヨー時代からの友人ですから、話はずみです。彼はディーラーブースで見つけた面白い製品を教えてください、会うたびその大会にきている彼の知人のマジシャンを紹介してくれます。今回はラスベガス在住のゲリー・ダーウィンを紹介してくれました。この人は、サムチップを使ったマジックの本を何冊も書いている人です。すでにサムチップのマジックを300種類以上書いているというから驚かされてしまいました。そして目の前で演技を始めるととどまることがありませんでした。

ダーウィン氏はコレクターとしても傑出していて、本と道具やその他の資料を誰よりも多く持っていて、一般には公開してはいませんが、彼の友人の紹介によって見せているそうです。今回もダーウィン氏は見にくいかと誘ってくれましたが、3泊の日程には隙間がありませんでした。来年のワールドマジックセミナーでは、必ず日程に組み入れようと思います。

マジックカフェではときどき旧交を温めていたピート・バイロ氏と、30年ぶりで会いました。思わず体を抱き合う出会いには、インターネットの交流などではとうていできないものがあります。2人の話は当然ダイ・バーノンのことにおよびます。ピートはバーノンの話し方を真似します。

「ところでピート、Magic Cafeのメンバーは緑のステッカーを名札に貼ろうと言っていたけれど、いままでに私は1人しか見ていません。あなたは何人見ましたか」と私がたずねると、彼もたった2人しか見ていないとっていました。少なくともマジックカフェの会話の中では20人以上がこの大会にくると言っていたのにです。このことは、いかにマジックカフェのメンバーがメンバーであることに誇りを持っていないかということを示していると思います。私はマジックカフェがアンダーグラウンドのものであるという印象を強めました。どんな人か知らない人といくら話しあっても真の交流にはならないのです。

ピートは大会の役員をしていましたから、夜のトークイベントが始まる時、まだ会場のドアが開くまえに、私をこっそり裏口から入れてくれました。そこで見た光景は一生私の脳裏から離れないでしょう。ステージではまだ準備作業が進行中なのですが、客席の片隅であるポール・ダニエルが4人のマジシャンに囲まれて、懇々と話し続けているのです。その話を真剣に聞いているのは、マジック界の哲学者ともいえるユージン・バーガーと、もっとも最近ラスベガスで成功したマジシャンであるマック・キングです。

マスケリンが書いていたことを思い出します。

教える者と教えられる者はともに、基本的な原理、すなわち彼等の行うことの裏付けを理解しないかぎり、エキスパートが所持し得る真の知識を得ることはできないと知っています。

このようにマジックを真剣に考える人たちが、先輩から後輩へと経験をバトンタッチしている光景を目の当たりにして、私は強い感慨を持ちました。そのような体験をできなかった自分、そしてたいていの日本のマジシャン、そしてこれからの若い世代のことを思うと、私たち自身がそのような土壌を作っていかなければならないのだと。

さて、私たちの最後の夜にクライマックスがやってきました。それはカードマジックにおける技法について、決定的な証拠を与えてくれる経験でした。

スライディーニ最後の弟子といわれるマーク・ミットンが、今回の参加者でナンバーワンだというジェオフ・ラタのマジックを見せたいと申し出てきたのです。それはその日のイベントが終わった夜中を過ぎた1時30分のことでした。それから私たちの部屋へ移動して、ラタ氏の独演会が始まりました。彼のコインマジックは驚異的でした。やはりレクチャーで見た彼のマジックよりもはるかに強烈でした。クローズアップマジックは、本当に目の前で見ると離れて見るのでは、雲泥の差があるのです。

リー・アッシャーのマジックがカードの神業ならば、ジェオフ・ラタのマジックはコインの神業なのです。とくに彼がレクチャーではやらなかった、ジョン・ラムゼイの'シリンダーとコイン'のラタバージョンは、バーノンが演じた同じトリックをはるかに越えていました。ラタはこのトリックを17歳のときから30年研究と練習を続けてきたと言いました。この執念こそ、他人のマジックを真似ばかりしてきたマジシャンがおよぶはずのない、真のアートの領域の存在を示しているのです。

ところがです。ジェオフ・ラタがカードマジックを演じてくれたときに、強烈な雷鳴が頭の中で炸裂しました。彼が行ったパスは、いままでに見た中でもっともインビジブルなものでした。パスされるカードはいっさい見えませんし、パスに必要な両手の交差している時間も短いのですが、それでもなお、そこでパスが行われたことが見えるのです。コインマジックを神業までに仕上げた彼のパスは、やはり技術として神業といえるほどすごかったのですが、それでもパスは技法として成立していないのです。何が行われたかは見えなくても、何かが行われたという印象は見えるのです。

そして帰りの飛行機の中で読んだマーティン・ナッシュの本の中の言葉が、たいへん印象的でした。

「カードマジックの技法というものは、カードと格闘するものではなく、カードの重さと表面のなめらかさとに調和させるものである」。

リー・アッシャーとジェオフ・ラタのカードのテクニックを両方見たことと、そして最後の最後にこの言葉に出会ったことは、これからの私のカードマジックに多大な影響を与えることになると思います。

---

ハリー・ローレンとジョン・スカーニの関係

= ハリー・ローレン、“Magic Café”、2004年2月4日 =

---

それは私が14歳のときでした。私はジョン・スカーニの友人の1人であることが誇りでした。ある日、私は彼の鞆を持って彼のあとをついていきました。彼は当時警察の機関誌にギャンブラーのテクニクのことを書いていて、その日は警察に行ったのです。

私は部屋の外で待たされました。部屋の中からは、「すごい！」とか何人かの嬌声が聞こえてきます。そしてスカーニがドアから頭を出しました。「ハリー、カード一組持っているかい」と。私はデッキを渡しました。さらに部屋の中のにぎやかさが15分ぐらい続いたあと、スカーニがドアから頭を出して、このカードにファンニクグパウダーをかけたいんだが、持っているかい」と言うのです。さすがに私は持っていませんでした。

しばらくたってから、スカーニが私に部屋に入れと言いました。すると女性の警察官が「あなたもマジックやるの」とききました。「はい」と答えると、「それじゃやって見せてよ」ということになり、私は得意のマジックを見せました。そのときの受け方といったら、スカーニを上まわっていました。それが私の大きな間違いだったのです。

1人がいいました。「こんなすごいスカーニさんやったことないじゃないの」と言ったのです。そのときスカーニの顔は紅潮していました。それが意味することをわかりもしない14歳の私は、調子に乗ってマジックを続けました。

その日を境に、スカーニがふたたび鞆を持たせてくれるまでには、相当な月日がかかりました。



---

◆◆◆

## アーマンド・ルセーロの神髄

= 加藤英夫、"カードマジックショーアップ講座"、2004年4月13日 =

---

◆◆◆

それは2003年オランダで行われたFISMマジックコンベンションでのことでした。この大会はマジックのオリンピックといわれるように、世界中からマジシャンが集まる最大規模のマジックコンベンションです。その大会で、誰も予期していなかったことが起こりました。それは大会のイベントの間にマジシャンが飲んだり話したりしているサロンにおいて、プログラムに書かれていないマジシャンが突然マジックを始めたのです。そのマジックのものすごさに、話をきいたマジシャンがサロンにどんどん集まってきて、そのマジシャンは何回も何回もマジックを繰り返し、本来の大会の出演者の誰よりも話題をさらってしまったのです。

私はその大会に出席していたのですが、残念ながらそのマジシャンを見逃してしまいました。そのマジシャンの名前は、アーマンド・ルセーロ。メキシコ生まれのロス・アンゼルス在住のアメリカ人です。彼はFISMでの衝撃的なマジシャンの世界への登場のまえは、いっさいマジックの大会などに参加することはありませんでした。いってみればマジシャンの世界では無名でした。FISMで一気に有名になったルセーロは、多くの国のマジック大会に出演依頼されることになりました。

2004年1月のラスベガスで開催された"ワールドマジックセミナー"にルセーロも出演しましたが、幸いにも私はこの大会に参加していたので、彼の演技を見ることができました。ルセーロのマジックを見た印象を一言でいえば、"魔法に見えるマジックが存在するのか"という思いです。彼のマジックには、いっさいの怪しさがありません。"あのとき何かをやったな"という気配をいっさい感じさせないのです。これには心底驚かされました。FISMで世界中のマジシャンがうならされたのがよく理解できました。さて彼は2004年4月、"箱根クロースアップマジック祭"という日本のマジック大会に出演することになりました。私はすぐに参加申し込みしました。彼は演技を見せてくれるだけでなく、彼のマジックに対する考え方を講演するレクチャーも行ってくれるというのです。

そしてふたたび見たルセーロのマジックは、2度目でもやはり魔法でした。そして彼のレクチャーで話をきいたとき、私は安心しました。最初に彼の魔法のようなマジックを見たときには、誰もあのレベルのマジックはできないだろうし、あのレベルのマジシャンを育てることはできないだろうと思っていたのです。しかし彼のマジックには確固たる理論の裏付けがあることがわかり、それをJCSの生徒の人たちにも理解してもらえば、魔法のようなマジックを演じられるマジシャンを育成することはできると確信したのです。

さて、ルセーロのマジックの神髄とは何でしょうか。それは彼の言葉“Closing the door”に表現されています。“ドアを閉じる”とはどういうことでしょうか。これは観客がトリックについて考える入り口を閉ざすということです。相手に考えるいっさいの糸口を与えないために、あらゆる手段を駆使するということです。

では彼がドアを閉じるために使う実際の手口はどんなものでしょうか。彼が頻繁に用いているのは、“動作に理由づけをする”ということです。たとえばダブルリフトを例にしてルセーロはつぎのようなことを説明しています。

ダブルリフトして2枚の表を相手に見せながら、「手を出してください」と言います。そして右手の2枚をデッキのトップに置き、上の1枚を取って、相手の手の上にのせます。そのあと適切な演技を行ってからそのカードを表向きにして、カードが変化したのを見せます。

上記のやり方は悪いやり方です。2枚のカードをいったんデッキの上に置くという行為に対して、何の理由づけもされていないので、その行為が怪しく見えてしまうのです。相手が手を出したら、2枚をいったんデッキの上に置き、右手で相手の手をつかみ、「もう少し下げてください」と言って、相手の手を下げます。相手が低く手を出した場合には相手の手を上げます。それからトップから1枚を取って相手の手にのせます。カードをデッキに置くのに、相手の手を動かすという理由づけがなされました。

このように技法を行うときは、その動作が自然に見えるように、その動作を行う理由をつけてやるというのが、相手に考える糸口を与えないという、“ドアを閉じる”ための手法のひとつであるのです。

さらにダブルリフトによるカードの変化現象に関して、ルセーロが強調していたのは、“技法と現象の間になるべく時間をあけるようにする”ということです。たとえばダブルリフトを使って、テーブルに置いたカードを変化させるマジックを考えてみましょう。

ダブルリフトして表を見せ、裏返して上の1枚をテーブルに置きます。すぐにそのカードを表向きにして変化現象を見せたのでは、ダブルリフトを行った印象が観客の記憶に残っているので、観客が記憶をたどることができるのです。ですから、カードをテーブルに置いたあと、「あなたのカードはこれではありませんね。あなたのカードは何でしたか」とたずねたり、テーブル上のカードに対してゆっくりハンドパワーをかけたりして、時間を稼ぐのです。それからそのカードを表向きにします。

彼はこのようにも言いました。“私は難しいテクニックはできるけれど、それはあくまでも自分がそのような難しいテクニックをできるという心の余裕を持つためであって、実際にそのようなテクニックを使うことはありません。観客から見て難しいテクニックを

使っているような気配を感じさせたら、それはドアを閉じることに反するのです”。

ルセーロの言葉でもうひとつ気になったのは、“Conditioning the audience”(観客を慣らす)という表現です。彼が例として取り上げた例でわかりやすいものとしては、スポンジボールのパームについて説明するとよいと思います。彼は両手をテーブルの縁に置いてポーズをとりますが、スポンジボールをパームしているときもしていないときも、同じ形で両手をテーブルの縁に置きます。手に隠していないときもその仕草をしますから、何回もそれを繰り返すことによって、観客はその手つきが怪しいものだとは思わなくなります。これが“Conditioning the audience”であるのです。

これはルセーロがレクチャーで述べたことではありませんが、私が気づいたことがあります。彼は演技の動作やセリフの流れの中で、観客の注目を強く集める部分と、注目をゆるめる部分をうまく織り交ぜます。そして観客の注目がゆるんだ瞬間に技法を行うのです。これはレクチャーで彼が話さなかったことですので、彼が本当は誰にも教えたくない奥義なのかもしれません。

そのようにしてルセーロは、観客の思考のドアをぴしゃりと閉じることによって魔法を生み出しているのです。彼は言いました。“私はマジックを見せて拍手をもらうことよりも、拍手ができないほど驚嘆させたいのです”。

---

フレッド・キャップス物語  
= ジョン・フィッシャー、雑誌“MAGIC”、2004年9月 =

---

1976年に、私がプロデュースするマジックショーが、初めてテレビで放映されました。それは、BBCのマイケル・パーキンソンショーの一環として企画されたものでした。このショーは、イギリスと国際的なエリートマジシャンを紹介したものとして賞賛を浴びました。

その当時私は、ケン・ブルックとたいへん親しかったのですが、彼こそ、一般の人々の目に対して、どのようなマジックが喜ばれるか、編集者の感性を持っていました。出演者を誰にするかということについて、彼の意見を求めました。そのとき私たちは、彼のマジックショップの倉庫にいました。彼はカードにラフ加工をしていました。私がこの質問を投げかけると、すぐに彼は「フレッドを加えるべきだ」と言いました。

それまで私は、フレッドのことをあまりよく知りませんでした。FISMでのアクトとか、オランダ対イギリスのマジシャン対決とか、テレビ番組では見たところがあります。フレッド・キャップスがいたのでは、イギリスが勝つのは無理というものでした。

1950年代に放映されたBBCのデビッド・ニクソンの‘イツマジックショー’も忘れられません。フレッドは、ジプシースレッドを演じました。それは彼のマニピレーションアクトをも越える完璧なマジックでした。たしかダイススタッキングも演じたと思います。このマジックの写真は、よく彼の宣伝写真として使われましたね。

もしもこのオランダのマジシャンが契約してくれたら、私の計画の大半が解決することになります。数日後に偶然、テレビプロデューサーのジョン・アンダーソンが書いた本、“マジックダイジェスト”を見たら、「世界最高のマジシャンは誰か」という見出しで、「それはフレッド・キャップスである」と書かれていました。そこにはつぎのようなことも書かれています。

「ひとつの分野では、キャップスと同等に演じられるマジシャンが少数いるでしょう。しかし彼は、すべての分野で間違いなくトップレベルなのです。ですから世界最高というのは、根拠のないことではないのです」と。

このようにして2人の識者の裏書きを得て、私はフレッド・キャップスが世界一流のアーティスト、ジョン・レノン、マーゴット・フォンティーン、ジャック・ペニー、フレッド・アステア、デューク・エリントン、ジュリー・アンドリュース、ビング・クロスビーなどが出演してきたショーに、主役として出演すべきマジシャンだと確信いたしました。

1976年11月16日に収録されたパーキンソンマジックショーは、70分の番組で、その年のクリスマスに放映されました。フレッドとともに出演したのは、リチャルディとリッキー・ジェイでした。

70分コマーシャルなしの番組でしたが、ケーンとキャンドルのプロダクション、煙とコイン、セルビットの伸縮イリュージョン、そしてタイトルバウムの道具を使ったチンカチンク、ボブ・ドライベックのダイストリック、ジプシースレッド、フローティングゴルク（これがテレビで最高の効果を発揮したのです）。そしてエドワード・ビクターのイレブンカードトリックを紙幣を使って演じました。ショーはフレッド・キャップスをハイライトするものとなり、他の2人は陰が薄くなりましたが、その2人でさえ、フレッド・キャップスが世界一のマジシャンであることを認めたに違いありません。

パーキンソンマジックショーの大成功のおかげで、私は1978年に'フレッド・キャップスマジックショー'をプロデュースすることになりました。この番組では、前回よりもさらに広いレパートリーを見せたフレッドの他に、世界のトップマジシャンが多く出演しました。ノーム・ニールセン、グレン・ファルケンシュタイン、スライディーニ、そして島田晴夫でした。

しかしながら、そのショーのハイライトは、フレッドが演じた、ホーミングカード、チャイニーズステッキ、ワイングラスの脚に入る指輪、エンドレスな塩などで、それらはひとつのショーで演じてしまうよりも、シリーズ番組の毎回の目玉になるようなものばかりでした。BBCはそのことを感じて、シリーズ番組を作ろうと考えましたが、しかしその時にはすでに、フレッドの癌は進行していたのです。

1980年7月22日にフレッドがこの世を去ったとき、BBCは'フレッド・キャップスマジックショー'を、彼への追悼番組として、再放送いたしました。そのときの冒頭に流されたメッセージを忘れることはできません。

「オランダが生んだ伝説のマジシャンに捧げる」

フレッドの死は、私に衝撃を与えました。彼とそのまま仕事を続けていたら、私のプロデューサーとしてのキャリアは、いまのものと違っていただでしょう。フレッドの夢は、平凡なことをやらないエンターテイナーだけでショーを行うということでした。彼の考えていたのは、マルセル・マルソー、ジャズバイオリンのシュテファン・グラッペリ、ジャグラーのフランシス・ブルンとクリス・レモなどでした。私は彼の意志を尊重して、のちにポール・ダニエルズのショーで、これらのアーティストを集めてショーを行いました。

フレッドとの交流の中のハイライトは、ユトレヒトの彼の家を訪ねた時のことでした。世界一のマジシャン、その妻のネリーに温かく迎えられた時のことでした。私が滞

在したうちの1日、彼は彼が出演した劇場に招待してくれました。このショーでは、彼は2回出番がありました。最初の出番では、私が見たことがあるマニピュレーションをやりました。2回目の出番では、リンキングリングとかロープ切りという、出し物としては平凡に思えるものばかりをやったのですが、これが観客のみならず、私をもうならせる出来映えだったのです。このようなマジックを見事に仕上げられる彼こそ、世界一のマジシャンだと、再確認したのです。

それは、この劇場へ向かう旅行の途中でのことでした。彼がどのようにして英会話を学んだかを語ってくれました。彼はクラシックピアノの演奏をバックにしてしゃべるコメディアン、オランダのビクター・ボルグを参考にしたのだそうです。それを聞いてなるほどと思いました。ボルグのしゃべりが音楽と同調しているのと同じように、フレッドのしゃべりがマジックと同調しているのだとわかりました。

フレッドのセリフには、ボルグの影響が見られます。彼の額に汗があふれたとき、もしくはそのように演技したとき、彼は上を向いて言います。「このビルは素晴らしいですが、どうも屋根から冷房が抜けているようですね」。彼はこのようなセリフを言うとき、マジックをやっている手を止めて言います。彼のビデオを見て、いつも同じところで笑ってしまいます。「右手にカードを持ちますよ。右手というのはこちらの手のことですね。(このジョーク理解できませんでした)」とこのように、動作と動作の間に割り込んで入れられる軽いジョークが、いつもコミカルな味を醸し出すのです。

ボルグがキーボードに向かってチャレンジする姿が、いかにも音楽に操られているかのような感じであるのと同じように、フレッドはマジックに操られているかのような演技をします。この点では、フレッドはカーディニの唯一の継承者といえるでしょう。酒を飲んだアクト、カード、ビリヤードボール、シガレットなどが、彼の意図ではなく、出たり消えたりします。これはケーンやキャンドルについても同じです。彼の予期しないときに現象が起こります。

アピアリングケーンやマルチプルキャンドルは、道具としたら、それだけで初めから種がわかるような道具です。パニッシングケーンも同様に、これらの道具が使われたとき、観客はどんなことが起こったか、まったくわからないというものではありません。パニッシングケーンについては、この問題は1930年代に、ロバート・ハービンによって解決されました。新聞紙に包んだケーンが消失するというやり方をしたのです。

そのやり方はフレッドに影響を与えましたが、彼はその考え方をさらに進めて、ケーンを出現させるときにも適用したのです。ケーンは、彼が体の向きを変えようとしたときなどに現れて、彼自身も観客も驚きます。ケーンが出始めると、彼はうんざりした顔つきで、ケーンを捨てていきます。この演技では、ケーンはマジックの道具ではなく、フレッドがこれから見せようとするのを邪魔する物なのです。けしてケーンを出現

させて得意がるようなことはしません。この点を学ぶには、彼のエド・サリバンショーの出演ビデオを参照することをお奨めいたします。

同じことが、彼のエンドレスな塩にも見られます。彼は塩が止まらないことに驚きます。音楽が終わっても止まらないので、音楽を続けてくれと催促します。イレブン紙幣でも同じです。11枚の紙幣を使うと数えませんが、10枚しかありません。

ホーミングカードにおいては、さらにはつきりわかります。やり方自体は、ジーン・ヒューガードの“Showstoppers with Cards”に出ているものです。彼はどんなマジックでも、シンプル化に関しては、特別な能力を発揮します。現象としては、黒いカードのファンの中に、1枚だけ赤いカードがあって、彼が赤いカードをどけても、また黒いカードの中に赤いカードが現れます。それが1枚になるまで繰り返されます。カードが少なくなるにしたがって、フレッドの怒りは高まっていき、最後に1枚の赤いカードが残り、彼はこのカードをたたきつけて終わります。そしてここで急に顔つきが変わります。「もちろん、いまのはジョークです。でも面白かったですよ」。彼が怒っているときは、まるで本当に怒っているように感じてしまいますが、そのコントラストが素晴らしいのです。このような演技ができたのは、彼の他にはカーディニだけでした。

パット・ペイジはフレッド・キャップスの演技者としての能力について、私に説明してくれたことがあります。彼のコインマニピレーションの中で、コインを出現させる寸前に、コインをパームしている段階があります。出現現象を不思議に見せようとするなら、普通のマジシャンは、手が空であることを見せる必要があるでしょう。でもフレッドは必要ないのです。彼の演技を見ている客は、彼の手が空であるということを、無意識のうちに暗示されているのです。

マジシャンがフレッドについて知っていることといえば、FISMで3回連続してグランプリを獲得したことでしょう。1950年のバルセロナ、1955年のアムステルダム、1961年のリエージュでした。でもフレッドにとってこれらは、彼のマジックの活動の中で、趣味の領域だと考えていたようです。たいていのマジシャンとは違って、フレッドはマジックが彼の人生のすべてでした。マジックは彼にとって仕事でもあり、同時にリラクゼーションでもありました。もちろん、カーディニと同じように、スポーツカーや写真、そしてポール・ダニエルズのように、ヨットも楽しみました。

カーディニが、有望なマジシャンは誰かとたずねられたとき、「チャニング・ポロックとフレッド・キャップス」だと答えました。この2人は、よく同じ劇場やリゾートで仕事をしまして、親友となりました。私は、2人が同時にロンドンで仕事をしたときの話を聞いたことがあります。その当時、フレッドはマニピレーションを演じていましたが、少し演技が地味で、それほど客受けしていませんでした。そのときチャニングが、アクトの中で何羽かの鳩を出したらどうかとアドバイスしました。するとフレッドは、そんな

ことをしたら、2人の区別がなくなってしまうといいました。

フレッドはそのようなスタンスを取りましたので、のちにロイ・ベンソンのチャイニーズステッキや、エンドレスな塩を真似たと避難されたときは、当惑いたしました。フレッドの言うには、それらのマジックは、彼が若いときに、彼の先生であるハンク・バーメイデンから教わったとのことでした。

バーメイデンは当時、ヨーロッパのマジック界の大物で、第二次世界大戦以後、ピーター・ピット、トニー・ヴァン・ドンメルン、ニベルコ兄弟、リチャード・ロス、ホー・ヤン・チャン、ゲル・コッパ、その他の多くのマジシャンを指導しました。バーメイデンはFISMのパイオニアであり、世界をよく旅行しました。ですから、アメリカ旅行の途中で、ロイ・ベンソンのマジックを見た可能性があります。

しかしビデオ以前の時代に、フレッド・キャップスが直接ロイ・ベンソンのアクトを見られるわけがありません。バーメイデンは、ドイツの“Triks”という雑誌も編集していましたし、アムステルダムでマジックショップも経営していました。そのような話があったとしても、のちにフレッドとロイ・ベンソンは親しくなりました。

その後また、フレッドはエド・デュバル‘親指から出る煙’のアクトをコピーしたということで批判を受けました。このマジックは、‘ラプソディ・イン・ブルー’で有名なデュバルのトレードマーク的なマジックでした。しかしフレッドがこのマジックを使い始めたのは、1965年にデュバルが他界してからのことでした。デュバルは1955年に引退していましたから、フレッドはやりたくてたまらなかったマジックを、10年間がまんしていたのです。彼は真似をしただけでなく、煙がグラスにたまるという、重要な面白さを加えました。

もしもフレッド・キャップスがアメリカに移住していたとしたら、ダニエルズやヘニングやカパーフィールドのように、大きな名声を得ていたと思います。とはいっても、彼はオランダで名声を得ました。イタリアのシルバン、スペインのタマリツ、イギリスのダニエルズのように。

私は、BBCのマジックの歴史に関する番組を作る直前にインタビューを受け、フレッド・キャップスの特長は何かと問われました。彼の温かい俳優のようなプレゼンスは別に、シナトラが歌で見せた精密さと同じように、フレッドはトリックの中に精密さを取り込んだのだと答えました。どの分野でも、ロールスロイスになるには、品質が良くなければ問題外です。私はフレッドがどのようなマジックと取り組んでも、必ず並のマジシャン以上のものにする力を持っていたと思います。マジシャンにとっては、彼のムーブを追うことはそれほど難しいことではないかもしれませんが、彼の感性は、つねに一般大衆の心理をキャッチするものでした。この本能的な能力について、フレッド自



身も認識していなかったかもしれません。

フレッドは、オードリー・ヘップバーンと腕を組んでティファニーの店から出てきてもおかしくない、ケリー・グラントやチャニング・ポロックと同等のハイクラスの雰囲気を漂わせていました。エド・サリバンは、ハイクラスのアクトを一目で見抜く力を持っていました。そして1964年2月9日のエド・サリバンショーで、視聴者7300万人という記録を達成し、その番組では、ビートルズのアメリカ初登場で競演したのです。

フレッドが観客を引きつけるコツは、普通のマジシャンがひたすら不思議さだけを見せようとするのと違って、あのチャイニーズステッキの演技に見られるように、彼のプレゼンテーションにかかっていた。彼のトリックは平凡なものです。フレッドのセリフをよく分析すれば、彼が情報の'かくれんぼ'をしているのがわかるでしょう。彼はとどこどころにニセの情報を配置します。そしてサッカートリックをアートにまでしてしまいます。そしてチャイニーズステッキという道具は、ただ傾けるだけです。誰でもやさしいマジックだと思います。でも私に言わせれば、傾けているの気づかれずにうまくやるのは、セカンドディールと同じぐらい習熟度があるものです。フレッドの手にかかれば、両方のヒモはまったくタイミングよく動きますし、棒を傾ける気配は感じさせません。

チャイニーズステッキは、平凡なものを黄金にかえてしまう、フレッドの技量を示すほんの一例でしかありません。カードを紙幣に置き換えたことも、平凡なトリックをよりエモーショナルなものに変えた例です。どのようなもの、たとえば、塩、キャンドル、煙、シャボン玉などでも、フレッドの手にかかると、それらから価値あるものが引き出されます。

たぶんエド・サリバンとの会話が、そのようなフィロソフィーを形成するのに関係したかもしれません。またアル・コランを崇拜してもいました。そしてダイ・バーノンの自然さにも傾倒していました。もちろんカーディニにも影響を受けました。いずれにしても、これらのマスターに共通することは、観客に与える効果を第一として、方法はそのあとの問題ととらえる姿勢だったと思います。

少年のころ、フレッドはシェファロのマジックの虜になりました。カラナグが引退しようとしたときに、フレッドにシム・サラ・ビンのショーを受け継がせようとしたのですが、フレッドは、すでに築かれたものを受け継ぐ気はありませんでした。ドイツの偉大なイリュージョニスト、カラナグを尊敬してはいましたが、エンタテイナーとしてそのような大がかりなことをやる気はありませんでした。

背が高く、立派ななりのフレッドは、貴族の雰囲気を持っていました。彼の客の扱いは、とくにイレブン紙幣に見られるように、模範的なものです。いかにもナート・ライプツヒの血を引いていたかのようです。

フレッド・キャップスは、1926年6月8日、アムステルダムに生まれました。彼の本名は、アブラハム・ピーター・アドリヌス・ボンガーズです。レストランの支配人の子供として生まれ、マジックの基礎の勉強は、オートミールのクーポン券を集めて得た本からでした。彼は水泳協会のために、14歳で初めて仕事をしました。そのときの芸名は、ヴァルディーニでした。その後の若い時期には、ミスティカと名乗りましたが、似たような名前が多いため、ハンク・バーメイデンから改名を奨められ、1950年に、布地メーカーのダックスの広告文中の、'Kaps' から命名したのです。

マジックに熱心だった10代の頃、彼がどのように将来の伴侶となるネリーを獲得したかは、よく知られた話です。彼の先生であり将来の義父となる、ピエット・ベルシュラーゲンは、床屋であり、アマチュアマジシャンでありながら、Mr. デュバルの芸名を持っていました。彼は、アブラハムが彼の家に頻繁に来るのは、マジックを習いたいのか、ネリーに会いたいからなのか、どっちだかわかりませんでした。

いずれにしても、2人は1952年に結婚し、バリーとゲリーという2人の娘をもうけました。しばらくすると、彼はオランダのテレビで、'キャップスのキャップサロン' という番組に出演するようになりました。それは、ヘアサロンの設定で、彼がその店の主人で、店員やパーマにかかっている最中の客にマジックを見せるというものです。

このシチュエーションは馬鹿げたものでしたが、時代を先取りしていました。しかもエレガントに構成されていました。フレッドが演じたのは、ロイ・ベンソンのボウルトリック、カップ&ボールなどでした。因みにこの番組のタイトルには、ダジャレが含まれていました。'Kapsalon' というのはオランダ語で、バーバーショップという意味があったのです。その番組に唯一登場したヘアドレッサーは、ネリーのお兄さんでした。

彼は几帳面な性格で、彼の工作室はきれいにされていましたし、作る道具もていねいなものでした。そのへんの几帳面さは、彼の技術に関する勉強や研究にも見られました。たとえば、シャボン玉を作るのにも、使う材料にこだわりました。特別に印刷した紙幣に塗るのも、もっとも滑りよくなるステアライトでした。そしてシャボン玉に見える最高のガラス玉をも求めました。また、煙を出すための科学薬品の研究もしました。

私は最近のテレビドキュメンタリーで、フレッド・キャップスを取り上げました。その番組のタイトルは、'ヒーローオブマジック' です。このような番組の編集の中心なるのは、ビデオクリップやインタビューシーンをうまくつなぎ合わせることです。私はフレッドのホームカードを取り上げたいと考えましたが、もとの演技は5分を越えるものでした。ひとつのシーンで60秒を越えるものはほとんどありませんでしたが、私はリスクを負うことにしました。ホームカードをいっさいカットせずに組み込んだのです。でもこれはリスクではありませんでした。フレッドはお客を引き込む名人でしたから、番組が終わってみれば、いちばん反響が大きかったのは、この部分なのでした。

フレッド・キャップスは、マジックのために生き、マジックを愛し、その喜びを観客に伝えました。ロバート・ハービンが50年代から60年代に活躍したあるアメリカのマジシャンについて述べたことがあります。「彼にはハートがありませんでした」と。しかしフレッドのマジックには豊かなハートがありました。彼のマジックは、ピースフルなものですし、流れるように、そして歌うように放射されます。それはフットライトを越え、テレビの画面を越えて、世界に届きました。

アンダーソンの言葉を見つけて以来、フレッドを賞賛する言葉をいくつも見つけてきましたが、ダイ・バーノンは言いました。「フレッド・キャップスは、私が知っているかぎりにおいて、最高のスライハンドアーティストです」。スライディーニは、「私が見たうちのベストマジシャン」と言いました。ジェイ・マーシャルは、「彼はいちばん上に立っていて、世界でもっとも偉大なマジシャンであると言えます」と。そしてマイケル・ヴィンセントのいった言葉が、みごとに的を得ています。「彼の成功の源は、彼の頭の良さと人間味の境目を曖昧にしたことにあります」と。

彼ほどテクニック、バーサリティ、威厳、毒と魅力とユーモアを、うまく混ぜたマジシャンは他にいません。私が最初にジプシーレッドを演じたのを見たときには、これだけのマジシャンになるとは予想できませんでしたが、ケン・ブルックは、そのことをまさに予知していたのです。

---

カードマジックが数学者を誕生させた  
= 著者不明、“スタンフォードレポート紙”、2004年 =

---

ペルシ・ダイアコニス、ジュリアード音楽院でバイオリンを学ぶ音楽生でした。しかし彼が16歳のときに、ダイ・バーノンに会ってカードマジックに衝撃を受け、ジュリアード音楽院を中退して、マジックキャッスルへと通うようになりました。それはラリー・ジェニングスがバーノンに会う以前のことでしたから、ダイアコニスがバーノンの一番弟子といえます。しかし彼の真理追究の興味は、数学の世界へと移っていきました。そのへのいきさつを、スタンフォードレポート紙より紹介いたします。(加藤)

高校の卒業証書を持たないダイアコニスは、24歳のときに、町の数学教室に通い始めました。そして26歳のときに、ハーバード大学に入学したいと望みました。その願いをかなえてくれたのは、彼が考案した2種類のカードマジックでした。それらはマーティン・ガードナーの“サイエンティフィックアメリカン”の記事の中で、いままでの最高傑作カードマジック10作のうち2種類として紹介されたのです。

そのガードナーがダイアコニスの望みを知り、やはりマジシャンであったハーバード大学のフレッド・モステラー教授に推薦状を書きました。数学界で強力な力を持つ2人のバックアップを受けて、ダイアコニスはハーバード大学に入学することができたのです。

話は飛びます。1974年にダイアコニスは、スタンフォード大学の数学教授になり、1982年には、優れた貢献をした数学者に贈られる、マッカーサー基金(5年間に20万ドル)を受けました。ダイアコニスはカードマジックに興味を失ったわけではありません。数学者として活躍しながら、数学の講義などでも、ファローシャフルの数学的な性質や、ギャンブルトリックにまつわる統計学など、カードマジックを数学に生かしているとのことです。

マーチン・ガードナーのインタビューより  
= “FOCUS”、2004年11月 =

ペルシ・ダイアコニスをマーティン・ガードナーに結びつけたのは、“サイエンティフィックアメリカン”に書かれた2種類のカードトリックでしたが、ガードナーがハーバード大学のモステラー教授に推薦状を書いたとき、その推薦を成功させたのは、ダイアコニスの得意とする、2種類のカードテクニックでした。その話を数学誌“フォーカス”の中に見つけました。以下は、ガードナーがインタビューで述べたことです。(加藤)

モステラーは、マジックの熱狂者でした。ペルシがハーバード大学に入りたいと言っ

たとき、私はモステラーへの手紙の中で、ペルシは私が知っている中でいちばんセカンドディールとボトムディールが上手だと書きました。このことがハーバード大学に入れた鍵となったのです。私と電話で話したとき、モステラーは、「ペルシは統計学を勉強する気があるかね」とききましたが、ペルシはハーバード大学に入れるなら統計学を学んでもよいと言いました。というわけで、ハーバード大学でモステラー教授のもとで統計学を学ぶことになりましたが、2人はきっと、カードマジックをやり合ったと思いますよ。

---

## デヴィッド・ブレイン世代のカーディシャン

= 新聞 "Brownsville Herald"、2005 年 1 月 16 日 =

---

いつの時代にも優れたマジシャンが現れると、そのマジシャンの影響を受けてマジックの虜になり、自分もプロマジシャンになって活躍するという、世代の連鎖があるものです。デヴィッド・ブレインの台頭からまだ 10 年経過していませんが、その影響が現れた例を、若きカーディシャンの例で見てください。ブラウンズヴィル・ヘラルド紙から紹介いたします。(加藤)

とくに特別な道具を使わない、その場にある物をつかってやるストリートマジックは、1997 年にデヴィッド・ブレインが TV スペシャルで始めた、新しいスタイルです。ジョニー・ガルシアはこのスタイルを受け継ぎ、しかもカードマジックだけにしぼりました。このようにして磨かれた彼の美しいカードさばきは、パティ・コルティナをして、「まるで彫刻家が傑作を生み出すのを見ているみたいです。違うのは、彼はノミの代わりにカードを使うことです」と言わせました。

彼にテクニックの上達の秘訣をたずねると、「ボクはいつもカードを持っていて、いつもテクニックを練習しているんですよ。すでにうまくできるものもさらに練習します。そしてボクは、仕掛けを使わないと決めているんです」。

---

## スティーヴ・コーエンのチャンバーマジック

= スコット・ウェルズ、"Magic Cafe"、2005年8月7日 =

---

スティーヴ・コーエンは、かなり長期間日本に滞在し、厚川昌男賞にも出演したこともあります。その当時は翻訳が本業のアマチュアマジシャンでした。彼は(株)テンヨーの英語の説明書の制作にも協力しています。私も何回か会ったことがあり、彼がニューヨークに行ってから、プロマジシャンとして大成功したことを知って、たいへん嬉しく思いました。

ところが彼がどのようなマジックをやっているか、どのような理由で成功したかは、いままでもどのマジック雑誌にも書かれたことがありません。何故なら彼は一流のクロスアップマジシャンとして、ニューヨークのウォルドーフ・アストリアホテルを中心に、ロンドンのギンガムヒルトンとか、今回紹介するヒューストンのフォーシーズンズホテルなど、世界の超一流ホテルのエンタテイナーとして忙しい毎日を送り、マジックの世界へはいつさい登場したことがないからです。

8月7日のマジックカフェに、スティーヴ・コーエンのマジックについて、初めて詳細のレビュー記事がのりました。一部を引用して、ここに紹介いたします。(加藤)

それはヒューストンのフォーシーズンズホテルの応接間でのことでした。40人の観客は、スティーヴ・コーエンの1時間15分間のマジックショーに酔いしれました。彼はマジックウオンドではなく、巧みな話術と、紳士的な温厚な振る舞いで、観客のハートをつかみました。ショーの初めから終わりまで、あちこちで「オー」とか「アー」とかいうため息が聞かれました。

応接間に入るとき、ホストの出迎えを受けながら、携帯の電源を切るように言われます。それぞれの客席には、'今夜の不思議のメニュー'が置かれています。クラシック音楽が流れ、部屋によい感じの雰囲気がちだち込めます。上には見事なシャンデリア、後には重厚なドレープが配されています。

音楽がちょうどよいところで止まり、スティーヴが登場します。洒落たモーニングに身を包み、私たちはいかにも高貴なパーティに招かれたような気分になります。

ショーの間、スティーヴは私たちを笑わせますが、それはけしてふざけたジョークではなく、紳士的な暖かいユーモアです。スティーヴは、私たちを見ず知らずの観客というよりも、ゲストとして扱ってくれました。たった1時間15分の間に、私たちはいかにもスティーヴの知り合いになったような気がしたものです。

彼は登場すると、カードを使ったマインドリーディングとフラリッシュの結合したものを演じます。3人の選んだカードがデッキに戻されたあと、彼は1人1人の心を読んでカードを当て、しかもカードが空中に飛んで、戻ってきてデッキにはさまります。このようにして、あざやかに3人のカードが当てられます。

つぎに私たちは席を立ち、スティーヴのテーブルを取り囲みます。彼が小さいときに、叔父さんから教わったコインマジックを目の前で見せてくれるというのです。彼の「帽子の下の銀貨」は、ミスディレクションのレッスンとも言えるもので、私たちマジシャングループを含む、すべての客を驚かせました。

客席に戻るときに、1枚ずつ紙片を受け取ります。そして自分の好きな飲み物の名前を書きます。5人の客が選ばれて、それぞれの客の書いた飲み物が、ひとつの同じケトルから、それぞれの客のグラスに注がれます。それを飲んだ客は、自分が紙片に書いた飲み物であることを認めます。最後の客だけは、紙片をポケットに入れさせたままですが、それでもグラスに注がれたのは、その客が紙片に書いたものでした。

スティーヴは、ショーが終わると、よろしければゲストブックにサインしてってください、と言います。そして彼が最近出版した本を紹介します。そしてアンコールに演じられるカードマジックが圧巻です。2人の客が別々のデッキをシャフルします。2組のデッキの赤と黒の順番が、見事にマッチしてしまうのです。

部屋を出るとき、スティーヴは私たち1人1人と握手をしてくれました。久しぶりに気持ちのよいマジックショーを堪能することができました。皆さんにも、新しいマジックの提供の仕方を、スティーヴ・コーエンのマジックで見ることをお奨めします。

以上が、スコット・ウェルズ氏のレビューからの引用です。スティーヴ・コーエンは、以上のようなショーを1日に3回行うそうです。入場料は、55ドルです。私は、スティーヴ・コーエンとメールをやり取りしたことがあります。彼は、「マジックから最高の効果を引き出すコツは、デビッド・ブレインのスタッフをしていたときに学びました」と言っていました。

超一流ホテルで評判を得た彼は、ハーパーコリンズ社から、「Win The Crowd」という本を出版しました。この本には、マジックで一般の観客を引きつけるノウハウが書かれています。(加藤)



---

◆◆◆  
ティングレイ姉妹、大活躍！  
= “Lima News Report”、2005 年 9 月 18 日 =  
◆◆◆

---

ファミリーマガジン社とディズニーハンド（ウォルト・ディズニーの子会社）主催の、ボランティア活動コンテストで、姉妹のマジシャンが優勝しました。リマニュースレポート紙から紹介いたします。（加藤）

‘プリンセス・オブ・マジック’と呼ばれる、ティングレイ姉妹、9歳のローガンと15歳のジョスリンは、養老院、子供病院などで、マジシャンとしての腕を発揮しています。2人は出演料を得たときは、シュライナー病院（恵まれない子供のための病院）に寄付してきましたが、今回の大会の優勝賞金6000ドルも寄付いたしました。「私はシュライナー病院が自分の家みたいに感じるの」とジョスリンは言います。

そして姉妹は手足の不自由な子供にマジックを教えます。手足が不自由でもできるようにアレンジしたマジックをです。「手がない子供に教えることもあるわ。喜んでもらえるのが最高なの」。

思わずぐっとなる話ですね。マジックはボランティアで最高の効果を発揮するようです。マジックが人々を大いに楽しませ、そしてマジック自体も進化することを期待したいと思います。私たちカーディシャンは、カード1組で素敵な時間を人々と共に過ごせるように、レベルアップしようではありませんか。（加藤）

---

## インターネットから去るカーディシャンたち

= 加藤英夫、“Cardician’s News”、2005年9月23日 =

---

今年は3人のカーディシャンに、連続して奇妙なことが起こりました。カードのフラリッシュDVDを発行して、XCM (Extreme Card Magic) というカードマジックの流儀を提唱していたデヴォは、今年の6月の時点で、DVDの製造中止することと、サイトを閉鎖することを宣言しました。

親子2代にわたるプロマジシャン、グレン・ビショップは、マジックカフェによく投稿していましたが、8月に「これが私の最後の投稿です。さようなら」という謎めいた投稿を残して、マジックカフェから姿を消しました。

“コジテーション”(Cogitation) という、高度なカードマジックのオンラインマガジンを発行していたスティーヴン・ユーエルは、今年の8月号で廃刊しました。ユーエル氏の廃刊宣言はつぎの通りです。

皆さん、いままでのご支援有り難うございました。コジテーションは発行を停止いたします。個人的な理由により、コジテーションが復刊することはありませんし、私自身、マジックの世界に戻ってくることも考えていません。

マジックキャッスルにもよく出演していた、プロカーディシャンであったユーエル氏のこの発言は、いくつものマジックフォーラムで波紋を起こしました。それらからわかることは、ユーエル氏を書いたカードマジックにまつわる暴露話や、カードマジックに対する論評に対して、本名のわからない批判メールが多発したことが関係しているようです。

なお“コジテーション”は、会員がサイトにアクセスして、自由にダウンロードするシステムだったため、突然サイトを閉鎖したユーエル氏に対して、ファイルをダウンロードしていなかった会員から文句が殺到しました。するとどうでしょう。ユーエル氏は、すべてのファイルを、誰でもアクセスできるサイトにアップロードして、つぎのように書きました。「もしも会員でない方がこれらをダウンロードする場合は、カトリーナで被害を受けた人々のために、赤十字あて寄付金を送金してください」と。

---

## 二人の秘密

= ダロー、・マルティネス、雑誌“Genii”、2005年9月 =

---

私がジミー・グリッポと初めて会ったのは、マジックキャッスルでバーノンのまわりに有名なマジシャンが集まっていたときでした。グリッポが私に何かをやれと言ったので、得意のマジシャンフーラーをやることにしました。それはマジシャンでもやり方を見抜けないようなカードロケーションです。カードを返してもらい、私がカードをシャフルしていると、意地悪くもグリッポはデッキを奪い、表を見てからオーバーハンドシャフルしました。「これで当てられるかな」と言ってデッキをテーブルに置いたとき、私は彼が1枚のカードをパームしたのを察知しました。

私はそれを指摘してグリッポを困らせるようなことはせず、デッキに魔法をかけて、「選ばれたカードが消えます」と言って、カードを広げて選ばれたカードが消えたことを見せました。そして、「グリッポさん、あなたの右手を右ポケットに入れて、中からカードを出してください」と言いました。グリッポは言われたとおりにやりました。まわりのマジシャンの驚きようたらありませんでした。この日から、私とグリッポは2人だけの秘密を分け合うことになったのです。

この即興的な2人のやりとりは、最初から計画的に演じても使えるアイデアです。たとえば、マジシャンは選ばれたカードを密かにクリンプします。そしてデッキを横取りした人がシャフルしているときに、クリンプされたカードをトップにコントロールし、デッキをテーブルに置きます。カードを選んだ人がデッキの上に手を置いて、しばらくしたらトップカードを表向きにします。選ばれたカードが現れます。というような演じ方ができます。(加藤)

---

## マジシャンとカードシャープ

= 加藤英夫、“Cardician’s News”、2005年10月7日 =

---

注文してあった“The Magician And The Cardsharp”が届きました。出版社の紹介文を読むと、センターディールの名手ケネディを見つけるミステリー、もしくは冒険小説のような感じがしましたが、実際に読むと、ケネディを探す旅を縦糸にした。バーノンのカードマジック追求の生涯を綴る、100% 事実にもとづいたノンフィクションです。

バーノンの生涯について書かれたものは、“The Vernon Chronicle”と、“Genii”に長期にわたって書かれた、バーノン自身による日記的な“Vernon Touch”が主なものでした。ところがそれらはどちらも年代順ではなく、バーノンが思い出した順で書かれているので、バーノンの生涯を一貫してとらえることはできませんでした。

その点、“マジシャンとカードシャープ”は、バーノンが父親にマジックを見せられてマジックに興味を持ったことから、アードネスの“Expert At The Card Table”をむさぼり読んだ日々、そして多くのマジシャンやギャンブラーとの交流を通して、バーノンのカードマジックが築かれていった経緯を、年月を追って読むことができます。ダイ・バーノンのカードマジックを研究する上で、貴重な資料といえるでしょう。ごく一部分ですが、紹介いたします。

### “マジシャンとカードシャープ”より

5歳のときに父親に見せられたマジックのシークレットがわかって以来、ダイ・バーノンはマジックに興味を持ち続けました。マジシャンというものは、シークレットというものの上に成り立っています。しかしそのシークレットを完全に理解して、頂点を極めるマジシャンは多くありません。バーノンは極めた1人ですが、彼はマジックの背後にあるシークレットというものは、不思議さを生み出すための、たんなる一部の要素でしかないことを知っていました。しかし、シークレットが出発点であることに違いはありません。マジックにのめり込むにしたがって、バーノンもシークレットを追い求めることになります。

10代初めに、自転車でオタワの町をまわるうちに、次第に彼がシークレットを求めるルートというのが出来上がっていきました。コインを消せる少年がいると聞けば、すぐに自転車で飛び乗り、その少年の家を訪ねました。競馬場でイカサマ賭博が行われていると聞けば、何時間もかけて競馬場まで行き、彼らの手口がわかるまでそこにいました。バーノンの生涯は、シークレット追求の旅だったのです。

カードマジックのもっとも奥深いシークレットは、ギャンブラーやカードシャープなどの、まっ

たく怪しさを感じさせないテクニックの中にあると、バーノンは信じていました。バーノンにとっては、彼らこそ偉大なマジシャンだったのです。そして出会ったのが、S.W. アードネスの "The Expert At The Card Table" です。彼はこの本を読んだ瞬間に、カードマジックのバイブルだと思い、生涯にわたって敬意を抱き続けることとなりますが、当時のマジシャンにとっては、この本の真価を見抜くことはできないものでした。

この本を読み、実際にギャンブラーから手ほどきを受けたバーノンは、カードマジックが長い歴史の中で、ギャンブラーのテクニックに負うところが多いことを知ることになります。バーノンは、ギャンブラーという閉ざされた世界の人々とも、うまく交流するコツを体得していました。カードを見事に扱えるように、人々をうまく扱うこともできたのです。そして、ギャンブラーから学んだテクニック、フォールスシャフル、パーム、スイッチなどを、マジックの知識と融合させました。

バーノンが学んだギャンブラーの中で、もっとも彼が夢中になったのは、フォールスディーラーを行う者たちでした。彼らはカードシャープの中でもエリートでした。セカンドディーラーを行う者は、ギャンブラー仲間では "ナンバーツーマン" と呼ばれていましたが、いかにも一組のトップからカードをディーリングすると見せて、トップから2枚目のカードをディーリングし、好きなところでトップカードをディーリングします。ボトムディーラーをする者は、トップからディーリングすると見せて、ボトムからディーリングします。

どちらも何年もの練習が必要ですが、カードゲームではたいへん役に立ちます。バーノンは、これらのフォールスディーラーを必死に探し求めました。彼らのテクニックは、マジックの世界には存在せず、マジックにとってもたいへん貴重なものでした。バーノンはそれらをマジックに取り入れることによって、他のマジシャンが実現できなかったことを、つぎつぎと実現していったのです。

いくら探し続けても、いまだに見つからない1人のギャンブラーがいました。そのギャンブラーは、その存在を隠し続けました。ギャンブラー仲間の中でさえ、ただうわさでしか存在しませんでした。そのギャンブラーは、ポーカーでカットされたあとの一組の中央から、いかにもトップからディーリングしたようにディーリングできる、センターディーラーの名手でした。

セカンドディーラーでは、好きなときに配れるのは1枚だけです。ボトムディーラーでは、好きなときにいつでもボトムからディーリングできますが、実際のポーカーでは、ディーラーが配るまえに、必ず一組がディーラーの右隣の人によってカットされます。ですから、ボトムに必要なカードが置かれてカットされたあとは、一組の中央からディーリングする必要があります。

そのようなセンターディーラーの名手が、中部にいるというわずかなうわさが耳に届きました。バーノンはこのギャンブラーにまつわる話の断片を集めることに精を出しました。しかし

くら調べても、そのギャンブラーがどこに住んでいるかは、なかなかわかりませんでした。あきらめかけたとき、ウィチタの牢獄に、ギャンブラーが投獄されていることを知りました。

バーノンがカードマジックに多くのものを残してくれたことの背景に、このような執念の日々があったことを知ることで、残してくれた財産の価値の偉大さを感じることができると思います。

---

母と子のコンテストジャーニー  
= 加藤英夫、“Magic Cafe”、2005年12月9日 =

---

マジックカフェに13歳のダコタ・ローズ少年が、“ボクのマジックのために、母が家庭裁判所に出頭しなければなりません。助けてください”という、悲痛な投稿をしました。

私は13歳で中学2年生です。私は将来プロマジシャンになるために、可能な限り多くのマジックコンテストに出ています。母もこの活動を応援してくれていて、コンベンションのための旅行も母が取り仕切ってくれています。しかし学校はよく休みますし、成績は最悪です。母はそのことを問題にしていますが、学校の方が問題にしている、いくら母に言ってもきかないので、とうとう家庭裁判所に出頭しろというのです。私たちはどうしたらよいのでしょうか。

この投稿の直後から、アドバイスの投稿が続出しました。ホームスクーリングで勉強を補強したらどうでしょう。成績が悪いからといって退学させられることはありません。学校の行事であなたのマジックで協力して、あなたのマジックを理解してもらったらどうですか。などなど。ダコタ少年は、多くの励ましに感動したようです。ダコタ少年のマジックを応援するような投稿の中で、つぎの投稿が心をとらえました。

私はあなたがプロマジシャンになるという志を持ち、努力していることに胸を打たれます。あなたの演技を何回か見っていますが、つねに進歩しているようです。しかし私はあえて、あなたがこれからもコンテストに出続けろとは言いません。あなたがプロになって、もしもうまくいかなかったり、何らかの理由で他の仕事をしなくてはならなくなった場合、このままでは、あなたの支えとなる知識とか経験が豊かであるとは言えません。マジックをやめろとは言いません。マジックと学業をバランスよくやるべきだと申し上げます。マジック以外の知識と経験を得ることも、必ずやマジシャンとしての基盤を強めることになると思います。

今年のラスベガスマジックセミナーに出場したダコタ少年は、ヤング部門で2位に入賞しました。はたしてコンテストに入賞することが、彼の生涯にどのように影響してくるのでしょうか。

---

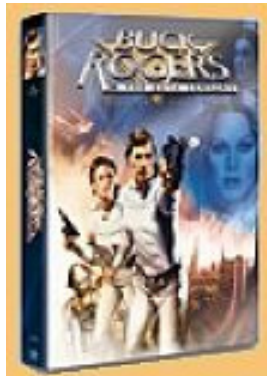
## 映画を作ったマジシャン

= “Cardician's News” 2006 年 3 月 24 日 =

---

### ジョルジュ・メリエス

マジックと映画には、深い関わりがあります。そもそも無声映画を生み出したのは、マジシャンでもあった、フランスのジョルジュ・メリエスでした。1898年のことでした。初めて世に現れた映画は、“4つのおかしな頭”という、人の頭が胴体から離れて、奇怪な動きをするという、まさにイリュージョン現象そのままの映像です。しかも初演されたのは、ロベールウーダン劇場という、マジック専用シアターでのことでした。1904年には、“生きているトランプ”という映画も作られました。マジシャンならではの発想の作品が多かったようです。興味ある方は、“Melies, The Magician”というDVDが売られていますので、インターネットなどで調べてみてはいかがでしょうか。



### ハーラン・ターベル

あの“ターベルコースインマジック”の著者、ハーラン・ターベルが映画を監督していた時期がありました。1934年に監督した作品は、“25世紀のバックロジャース”というもので、火星人の攻撃に立ち向かう、スーパーマンタイプの活劇です。ターベル自身も出演しています。この作品は、のちにリメイクされたものが、まだ販売されているようです。

### クリスチャン・フェシュネール

そして現代映画界で有名なのは、デヴィッド・カパーフィールドの‘リアジェットの消失’など、いくつかのイリュージョンの考案者でもあり、1979年のFISMのイリュージョン部門で入賞したことのある、フランスのクリスチャン・フェシュネールです。彼は監督



した作品もいくつかありますが、監督よりも上に立つ、制作や総指揮という仕事をしています。有名な制作作品としては、“橋の上の娘 (La Fille Sur Le Pont, 1999 年)”があり、ゴールデングローブ賞のノミネート作品になっています。他にも、“ポン・ヌフの恋人”、“ククリクのいた夏”などはテレビでも放映されたことがあり、映画通にはよく知られた映画製作者です。フェシュネールがマジック界で残した最大の貢献は、マジックの父とも呼ばれるフランスの偉大なマジシャン、ロベール・ウーダンの研究であり、自費を投入して出版したいくつかの著書です。2002 年発行の“The Magic of Robert Houdin”は、その決定版として、歴史の中に燦然と輝いて残るでしょう。

---

◆◆◆  
15年間の対話より  
= “MAGIC”、2006年9月 =  
◆◆◆

---

これは雑誌“MAGIC”の発行15周年にあたり、いままで掲載してきたインタビュー記事を抜粋で紹介したものです。（加藤）

\* ドン・ウェイン \*

カパーフィールドなど、25年間マジシャンのコンサルタント経験者としての話

マジシャンをコンサルタントするとき、「チャニングポロックのように成功したマジシャンにあなたもなれる」と話して、成功したマジシャンがやってきたようなことをやるよう奨めるが、たいていのマジシャンは耳を貸しません。

コンサルタントを始めるまえに、マジシャンのビデオを見て、どのようなスタイルが向いているかアドバイスしますが、そこで意見が食い違くと、私は仕事を引き受けないことにしています。

相談してくるマジシャンの多くは、彼のスタイルに合った新しいマジックを教えてくださいと言いますが、たいていの場合、彼らに必要なのは新しいマジックではなくて、スタンダードなマジックのステージングをしてあげることです。

「新しいマジックは必要ないというのですか」という質問に対して

ひとつだけユニークなマジックを完璧にレパートリーとしていれば、他のマジックはスタンダードなものでもよいのです。ひとつの強力なマジックを加えたとしたら、彼のショーは10%改善されるかもしれません。しかしレパートリーは変えなくても、彼の見せ方とステージングを改善するだけで、75%は改善されるのです。

\* アラン・ウェイクリング \*

アラン・ウェイクリングは、ウェインと同じく、インベーターであり、コンサルタント。

「良いマジックと偉大なマジックの違いは何でしょう」という質問に対して

偉大なマジックとは、あなたを観客に結びつけてくれるものです。奇跡的な現象に見えるマジックは、必ずしも良いマジックとは言えません。ときには、あまりにも信じら

れなくて、観客の心をあなたから離してしまいます。

「マジシャンはシグネチャーマジック(十八番芸)を持つべきか」という質問に対して

正直に言って、マジシャンは舞台を降りたら、名前などおぼえてもらえません。おぼえてもらえるのは、やったことだけです。おぼえられるようなものがないマジシャンは、その仕事で何も残さないことになります。

\* シークフリード&ロイ \*

「もしもあなた方といっしょに仕事をした人に、あなた方をどう思うかとたずねたら、どんな答が返ってくると思いますか」という質問に対して

いままで仕事をした中で、いちばん厳しい人間だというに違いありません。レ・ミゼラブル、スターライトエクスプレス、キャッツなどの副ディレクターをやったジョン・ナビエールなら、それらの仕事よりも私たちとの仕事の方がきつかったというでしょう。彼は私たちのような人間と会ったことがないでしょうし、私たちも彼のような人間と合ったことがありません。

「いっしょに働く人はたいへんだったでしょうね」という質問に対して

優れたプロデューサー、ディレクター、そして仲間がいましたが、それでもAからZまで、すべて私たちが決定するのです。ディレクターは、私たちの考えを理解して、それを他のスタッフに伝えるのです。そのような関係は、彼らにはつらかったと思いますよ。

「新しいマジックを作り上げるのは難しいですか」という質問に対して

道具制作の専門家に、このような道具を作ってくれと言うと、そんなことはできないと言われることがしょっちゅうです。しょうがないので自分たちで作ります。たとえば、象の消失は、私たちが作って日本に持っていき、日本で使えるように仕上げました。図面を見てできないと言うのではなくて、どうしても作らなければならないという状況が、作り上げる力になるのです。

\* ランス・バートン \*

「あなたの成功の原点は何ですか」という質問に対して

それは、私のお祖父さん、エルウッド・ハフマン氏の言葉です。ある年のクリスマスに、いっしょにレストランで食事をしたとき、祖父はつぎのように言いました。

「毎晩寝るまえに、目を閉じてあなたの夢を描きなさい。たとえそれがどんなものでも、毎晩その夢を思い続けるんだ」。

\* ジム・スタインメイヤー \*

「マジックを考案するとき、現象と方法のどちらから考えますか」という質問に対して

たいていは現象からです。何故なら、いちばん大切なことは現象であり、それが起こるプロットとそれが観客に与える印象だからです。

しかし方法も重要です。どのようなマジックの方法にも、必ずといってよいほど、弱点があります。ひとつの弱点をカバーするのに他の方法を用いると、他の弱点が出てきます。ですから、弱点をうまくイリュージョンの中に順応させることが必要になってきます。

方法というものは、それぞれが観客に異なるインパクトを与えるものですから、どの方法を選ぶかは重要な分かれ目になります。カードマジシャンでも、演ずるマジックに適した技法を選択して使うのと同じです。「こうやった方が簡単にできるじゃないか」というような考えは、たいてい間違っています。マジックの表面に見えるものがアートである以上に、現象の背後にあるものも、それだけでもアートであるのです。

\* エディ・タロック \*

「マジシャンのよくない演技の原因は何ですか」という質問に対して

第一に、良くないマジシャンは、しゃべり方が下手です。誰でもよくしゃべりはしますが、しゃべることと話をするということには違いがあります。しゃべるのはただ声を出すだけですが、話をするというのは、しゃべることを理解させることです。この2つには大きな隔たりがあります。

アクロバットはアクロバットとしてのトレーニングを受けます。歌手やジャグラーもそうです。しかしマジシャンがトレーニングを受けるというのはほとんどありません。マジッククラブやマジックショップでおぼえたマジックを練習してやるだけです。

\* ダグ・ヘニング \*

カナダでツアー中に、エスキモーの人々にマジックを見せたときの話

私は面白いことを色々やったつもりですが、エスキモーたちは笑いもせず、驚きもしないで、最後まで無言で私のマジックを見ていました。拍手さえもしませんでした。で

も、ずっと視線を私に向けたままでした。

1人だけ英語がしゃべれる人がいたので、たずねました。「マジックを楽しんでいただけましたか」。「ええ楽しかったですよ」。「皆さんマジックが気に入りましたか」と言うと、「えっ、マジックですって」と、驚いた顔で言いました。「ええ、マジックで楽しんでもらうのが私の仕事なんです」と言いました。

すると彼は、「楽しませるといいんですが、何でマジックをやるんですか。この世界がマジックそのものなのに」と言いました。私と彼は床に座ってゆっくり話をすることにしました。

「雪が降るのもマジックですし、水晶が色々な形に結晶するのもマジックですよ」。「でも私がウサギや鳩を出現させるのもマジックじゃないですか」と言うと、「あなたは何でそのようなことをやるんですか。春になるとセイウチが現れるのも、何も無いところから出てくるのですから、マジックです」。

私はため息が出ました。どうしたら私のマジックのことを理解してもらえるかと考えて、「銀のボールを空中に浮かばせてみましょう。それがマジックですよ」。すると、「毎日大きな火の玉が浮いていて、私たちを暖めてくれているじゃないですか。それがマジックですよ」。

そのあと、彼はエスキモー同士で色々話し合い、そして私のところに戻ってきて言いました。「ようやく私たちはわかりましたよ。あなたが何故あのようなことをやっているかを。それは、あなたたちがマジックを忘れてしまったからでしょう。マジックを思い出させるためにあなたはやっているんですね。それは素晴らしいことです」。

私はぐっと涙がにじむのをこらえられませんでした。「マジックについて教えてくれて有り難う。私は知りませんでした」。このときに、私はマジックというものが、ワンダー（驚嘆、奇蹟）を表現するものだとつくづく気づきました。そしてこの経験が、マジシャンとしての私をささえてくれたのです。

\* マーク・ウィルソン \*

「テレビでのマジック番組が多いことから、マジックのネタがつきる心配はありませんか」という質問に対して

音楽のネタがつきないということ以上に、マジックがつきるということはありません。新しいマジックはコンスタントに生み出されています。そしていままで以上に若手のマジシャンが育ってきています。

「この5年間に無数のマジックスペシャルがあって、1時間に10人ものマジシャンが登場するということが頻繁に繰り返されましたが、これの影響はいかがですか」という質問に対して

このようにつきからつきへとマジックを続けて見せられるのは、正直言って疲れます。もっと少ないマジックを適切に配分して見せるべきだと思います。

「いわゆるムービーマジックと呼ばれるマジックに危惧はありませんか」という質問に対して

このことは私がいちばん心配していることです。私も、テレビでしかできないことをやりたい衝動にかられたことがあります。私はけしてエンパイアビルを消そうとはしませんでした。何故なら、そんなことは絶対できないことを人々が知っているからです。

\* デヴィッド・ブレイン \*

「あなたの最初のテレビスペシャルは、観客の反応に焦点が置かれていました。これは誰のアイデアだったのですか」という質問に対して

それはほんのアイデアでしかありませんでした。私がマジックをやっていつも気にするのは、見ている人の反応です。驚きの反応が生まれること自体がマジックなのです。人それぞれの反応の仕方が、まさに人間的なものでした。ジャンプする人もいれば、叫ぶ人もいます。その部分をクローズアップすると、良い番組ができると思ったのです。

「1時間番組を作るのに何時間ぐらいかけますか」という質問に対して

できるかぎり多くの時間をかけます。ストリートでは、やるたびに受け方が違ってきます。ですから、1000回やっていちばん良いものを採用することがベストなのです。

---

## カーディニ物語

= ジョン・フィッシャー、雑誌“MAGIC”、2007年8月 =

---

カーディニは何回も芸名を変えましたが、1924年にオーストラリアで仕事をしたとき、芸能社の人にフーディニのような名前の方がよいと言われ、彼は即座に「カーディニはどうですか」と言って、それに決まりました。

オーストラリアの仕事では、1週間ごとに内容を変える必要がありました。そこで初めの週はカードとボール、つぎの週はタバコとシルク、つぎはウサギと旗、つぎは飲み物、つぎはシンプルと火、というようにつぎつぎと変えていきました。しかし当時のカーディニは、おしゃべりマジシャンであることに固執しました。「私の手には何もありません。指以外には」などというジョークをよく言ったものです。

彼は1926年にニューヨークに来て、翌年の3月には、名門のパレス劇場に出演していました。彼の演技は評判をとりましたが、彼はポスターにおいて、ディレクターのつぎに名前が出るように主張しました。そしてつぎのシーズンにパレス劇場に出演したときには、カーディニは高い評価の紹介文が書かれることとなります。その紹介文の最後には、「カーディニは、おしゃべりマジシャンの自分を捨て去り、スマートなマジシャンとして生まれ変わりました」と書かれました。そのときの彼のアクトはつぎのようなものです。

舞台上に登場したカーディニは、手に持っている新聞紙に焦点を合わせようとしています。そこへベルボーイの姿をした奥さんのスワンが現れ、「カーディニ様、カーディニ様はいらっしゃいませんか」と呼びかけます。カーディニの前を通るとき、彼女は彼の持っている新聞紙を取ってしまいます。しかし彼の手には、カードが持たれています。彼は怒った表情でカードをボーイの持つ新聞紙に投げ入れます。しかしそれでもカードが手に現れます。捨てては現れます。その現象の連続に、観客だけでなく彼自身が驚きます。

彼はタバコを口にくわえたパイプに入れようとしませんが、なかなか入りません。ようやく入ったと思ったら、すぐにタバコが消えてしまいます。タバコはまたパイプに現れます。言うことをきかないパイプを捨てると、こんどは火のついたマッチが手に現れます。彼はタバコに火をつけて、一服吸ってから捨てますが、タバコは彼の手や口に現れます。それが何回も繰り返し替えられます。このころには驚きで彼のモノクルは目からずり落ちています。いくら捨ててもタバコが出てきて、彼は舞台を去りかけますが、袖に到着したときには、大きなパイプを両手に持っています。そのクライマックスのまえには、結ばれたハンカチがほどけたり、ボールが現れたり変色したりしますが、いちばん重

要なことは、それらの奇怪な現象が、いかにも彼を困らせようとする見えない存在によって起こされているように見えることです。

カーディニはパントマイムのうまさから、6200席もあるラジオシティミュージックホールのような大劇場でも、タバコやボールのような小さな物で観客全体を湧かせました。おそらく半分の客には、彼の持っているものが見えなかったはずです。

カーディニの行ったマジックそのものは、何も彼が初めてやったものではありませんでした。手袋をはめた手でカードを出現させるのは、1913年にポール・フリーマンがやっています。火のついたタバコを出現させるのは、1915年にボードビルでスペイン人のホセ・フローレンスがやっています。しかしながら彼はこれらのライバルたちを、演技力で蹴散らしました。それはたんにマジックの現象を自らやって見せる普通のマジシャンとは違います。とにかく彼が自分で何かをやっているというのではなく、彼のまわりで現象が起こっているように見えるのですから。

オーソン・ウェルズは言いました。「ショービジネスでは、生きているいまの時代性を取り入れなければ成功しない」と。

ロベール・ウーダン、モダナイズされた正装という、フランスの当時の時流にのっとった衣装でマジックを演じました。その一世紀あとのアメリカでは、ダグ・ヘニングがヒッピー世代の恰好で舞台に登場しました。このフランス人とカナダ人の時代の間で、その時代をとらえたのはカーディニでした。'スワープ・ディシーバー'（華麗なる詐欺師）というキャッチフレーズがまさにぴったりでした。

50年代にチャニング・ポロックが現れるまでは、カーディニほど燕尾服を華麗にまとったマジシャンはいませんでした。彼はファッションの見本でした。そのスタイルだけをみても、フレッド・アステアと並び賞されるに値しました。バーノンの話では、フレッド・アステアが長いテールの燕尾服を着るようになったのは、カーディニの影響だったそうです。マジシャンにとってネタ取りに都合のよいことが、ダンサーにとってテールがきれいにひらめくという美しさにつながったのです。

カーディニは、エンタテイナーのブランドイメージ作りの重要さを知っていました。コメディアンたちも、大衆に受けるという点で、いつもこのことに敏感でした。チャップリンの歯ブラシのようなヒゲとヨレヨレの杖、キートンのあのパンケーキハットや無表情な顔、ローレル&ハーディの体のコントラスト、ジョージ・フォーンビーの縮んだ服、誰が見ても誰かわかるものでした。

カーディニのパーソナリティが完成したときもしかりです。その中でも決定的なのはモノクル（片眼鏡）でした。カーディニはこれを落とさないのに苦労したそうですが、そ



れだけのかいがあったというものです。毒と華のあるその出で立ちは、いかにも上流階級の雰囲気漂わせ、しかも彼の出身地である英国をバックボーンに感じさせるものです。

ヒゲについては笑い話があります。手にパームしていた火のついたタバコで、一方のヒゲだけめくれてしまったことがあるそうです。彼は一生懸命本物のヒゲを伸ばそうとしましたが、うまくいきませんでした。1930年代の半ばにひとつの形の付けヒゲに固定しました。それによって彼の威厳が増したのです。因みに20年後に登場するチャニング・ポロックの成功は、反対の行為によってもたらされました。彼はそれまで生やしていたヒゲを剃ったときに、スター性を輝かせ始めたのです。

手袋については、マニピュレーションテクニックがすごいと見せるのに役立つだけでなく、彼の手に注目を集めるのに役立ちました。1931年のモーニングオレゴニアン新聞には、“しなやかでセンシティブな彼の手は、ロシアのバイオリニストのようでありました”と書かれました。

カーディニについての1944年ニューヨーカー新聞の記事は見事でした。

“カーディニのマジックを見ると、マジックは減びていなかったことがわかり、機械仕掛けに頼っていた時代から脱したことを告げています。絵画が写真に一時期とって替わられようとしたのを挽回したのと同じように、マジックは原点に戻り、もっと生き生きとしたものとなりました。いまの大衆は、カーディニのマジックを心から受け入れています”。

彼が火のついたタバコを出現させるのは、タバコが大衆に好まれた時代に合っていました。マジックはいつでも時代にあったものを扱って成功してきました。ワインと水を使うマジックが受けた時代、インドでは米と水を使ったマジック、今日のラスベガスではメルセデスを出現させたりします。そのような推移を見ると、カーディニのタバコのアクトは、タバコが肩身の狭いものになった今日では、受け入れられないかもしれません。

当然ながら時流に乗ったカーディニは、数多くのマスコミに取り上げられることになります。シカゴサンデートリビューン1935年818日では、1ページ大のカーディニの写真と、彼がカードのテクニックを見せている39の写真が見開きで登場しました。テクニックの写真にはある程度の解説が書かれていたので、マジシャン仲間はエキスポージャーではないかと心配しました。しかし彼らは、このようなことがマジックのレベルを上げるのに役立つということを知りませんでした。マジシャンのテクニックのすごさを見せたことは、他のマジシャンに威厳すら向上させたのです。

カーディニが他のマジシャンと違っていたのは、それまでマジシャンに関心を持ってい

たなかった大衆に対して、関心を引くコツを心得ていたことです。そのコツのひとつは、彼の観客がインテリジェンスを持っていると、彼が態度に現したことです。このようにしてユニークなキャラクターを完成されたあとは、一時たりともそのキャラクターから逸脱することはしませんでした。

皮肉なことに、カーディニは他のマジシャンとの違いを、'偉大な力を持つ魔法使い'という、それまでのマジシャンが守ってきたイメージを捨て去ったことによって得たのです。ほろ酔い加減の男のまわりで不思議なことが起こるといふ演技に置いて、彼はテクニックを見せるどころか、テクニックにベールをかけました。専門家の間で高く評価された彼のテクニックも、一般大衆は彼がテクニシャンなどとは知らなかったに違いありません。カーディニは、テクニックを見せびらかす態度が、マジックが大衆に受け入れられない要素であることを、完全に理解していたのでした。

とにかくにも、カーディニは 1930 年代のマジシャンの象徴になりました。その反動として、彼は歴史上、もっとも模倣されるボードビルエンターテイナーとなりました。しかし誰1人として、彼のスタイルと完全性、ドラマとしての統一性など、オリジナルが持つ素晴らしさの足下にもおよびませんでした。

---

ターベルコースインマジック日本語版出版についての回想

= 加藤英夫、“TENYOISM”のための資料、2013年4月 =

---

(株)テンヨーが“ターベルコースインマジック”の日本語版を出版するという事は、創業者山田 昭氏のマジックにかける情熱の現れの、いくつかのイベントのうちのひとつでありました。

山田氏は私がテンヨーに入社したころ、日本のマジックを発展させていくには、私たちがオリジナルなものを生み出していかなければいけない」と言われました。その山田氏の信念は、私が考案した‘不思議なルビー’を皮切りとして、今日まで皆さんが愛してくれているテンヨー製品として膨大なコレクションとして結実したことは、ご承知の通りです。

自分たちが生み出すマジックについての考え方の変革だけでなく、日本のマジシャンたちへの指導ということについても、山田氏は変革しなければいけないと考えていました。

私がマジックを趣味として始めた1956年からテンヨーに入社した1962年当時は、日本のマジック界の発展のよりどころは、欧米のマジックから学ぶということが主体でありました。多くのマジシャンたちは英語に堪能ではなく、指導者が紹介したものを通して学ぶということになります。

もちろんそれは日本のマジックの発展に貢献いたしました、いくつかの問題を含んでいました。ひとつはそのように海外の作品がされること、日本のマジシャンにとって価値観のあるものになっていき、海外のマジックを競って人に見せることが、日本のマジシャンの楽しみを中心であった時期が続いてしまったことです。

もうひとつの問題は、紹介されるマジックは、原作者をクレジットしてはいるものの、正確な翻訳ではなく、紹介者の都合のよいようにアレンジされて紹介されることが多かったことです。それはまるで欧米の音楽家が演奏するのを聞くことなく、楽譜を見て日本人が演ずる音楽を聞くようなものだったと言えるでしょう。

第二次世界大戦の敗戦国となった日本は、「欧米に追いつけ、追い越せ」の気概を持って働いてきました。しかし欧米のマジックを文献や指導者を通して模倣するだけでは、決して追いつくことも、ましてや追い抜くことなどできません。そのようなことから山田氏は、その当時日本でもクローズアップマジックの最高権威であるとされていた、ダイ・バーノン師のマジックを直接日本のマジシャンに見せるべきだと考えました。

ここでバーノン師を招聘することになった 1969 年の 4 月の、山田氏の訪米旅行の話  
を挿入させていただきます。その旅行には私も同行したのですが、マジックにかける  
山田氏の執念というものを感じさせられた旅行であったことを忘れられません。

その旅行では、ミシガン州コロンの 'Abbott Magic' を訪問する予定でした。しかしい  
ざアボットマジックへ行こうとした朝、2 人でアボットの住所を確認したときのことで  
す。私たちが間違った町に来てしまったことに気づきました。私たちは何故か、オハイオ  
州のノーウッドのホテルに泊まっていたのです。

その町は Haines House of Magic のある町でした。そのことを思い出した山田氏は、  
「加藤、このまま何もしないわけにはいかないから、Haines House of Card へ行こう」  
と言いました。ということで、その間違いによって、テンヨーは Haines House of Card  
からトリックデッキを輸入して販売することになったのです。

その旅行では、マジックキャッスルでダイ・バーノン師に会いました。山田氏はバー  
ノン師の人柄に魅了され、バーノン師を日本に招聘したいと決意したのです。世界  
最高峰のマジシャン、ダイ・バーノン師の本物のマジックを日本のマジシャンに見せ  
たいと考えたのです。バーノン師に山田氏の熱意が伝わりました。そこから先の、バー  
ノン師招聘については、ぜひ "Genii" の 1969 年 9 月号を参照してください。

"Genii" のその号では、ダイ・バーノン師が訪日旅行の感想を書かれています、  
ひとつだけ補足したいことがあります。それはバーノン氏の訪日をきっかけとして、日  
本の誇るクリエイター、沢浩氏の存在が私たちのマジシャンの前に現れたことです。  
ダイ・バーノンとラリー・ジェニングは沢のマジックを見て感激しました。見た直後の  
2 時間は、彼ら 2 人はホテルの部屋に閉じこもり、沢のマジックについて熱く語り合っ  
ていました。

そしてのちに、沢がホテルの部屋で疲れて寝ているとき、ジェニングスは私に言いま  
した。「加藤、私たちの前で寝ているのは、マジック界の天才だよ」と。まさにダイ・  
バーノン師の来日は、本物の素晴らしいマジックを見る感動を得ただけでなく、知ら  
ないうちに咲いていた日本のオリジナルマジックの美しい花を見つけることにつながり  
ました。

さて、"ターベルコースインマジック" の本題に戻ります。

山田氏は、海外のマジックを適当にアレンジして紹介するのではなく、英語で書かれ  
たものを可能なかぎり正確に日本語に翻訳して、日本のマジシャンに読んでもらいた  
いと考えました。ここまでお読みになってきた読者の皆さんなら、マジシャンとして日本  
人に見せたいのがダイ・バーノンであったなら、マジックの文献として日本のマジシャ

ンに読んでもらいたいと考えのが何であったか、想像するのが難しくないはずですよ。そうす。“Tarbell Course in Magic”です。

当時の著作権所有者の Tannen Magic Shop のトニー・スピーナ氏と契約を交わし、全巻を日本語に翻訳してテンヨーから出版することに決定いたしました。

本の翻訳出版という、翻訳者が中心人物のように思われがちですが、“Tarbell Course in Magic”に関しては、山田氏のマジックにける情熱と決意が出发点であることは、すでにご理解いただいていると思います。さらに編集者の近藤博氏の仕事は翻訳者以上にたいへんな仕事でした。当時はまだパソコンもなく、ワードプロセッサもありませんでした。私が書いた読みにくい文章を原稿用紙に書き直し、文字の間違いを訂正し、内容についての確認をしてくれました。

私はカウフマン氏とのインタビューで、テンヨーでのマジックの開発の仕事はどのようなものでしたかと質問を受けて、私は「それはチームワークによるものです」と答えました。まさに“Tarbell Course in Magic”もチームワークあってこそ実現できたのです。

翻訳という仕事は、英語を日本語に直すだけの仕事ではありません。著者の考えていることを理解した上で、それが伝わるように書くことです。それは英語を日本語に置き換えることでは実現できません。いったん書かれていることを脳に取り込み、著者の気持ちになって自分の言葉で表現することです。

私は翻訳を進めるにしたがって、ターベル師のマジックに対する情熱が乗り移ってきたような気がします。ですから、著者の気持ちになって書くということは、それほど難しいことではありませんでした。しかももともとマジックが好きな私でしたから、翻訳のスピードはかなり速い方だったと思います。

1975年に第1巻を発行して、第7巻は1981年の発行ですから、1年に1巻のペースでした。カウフマン氏が編纂された第8巻は、日本語版は1995年に発行されました。1年に1巻と言っても、翻訳業務に実際にかかったのは、1巻に対して3ヶ月から4ヶ月だったと思います。近藤氏の編集の仕事は、おそらく私以上の時間がかかったと思います。

よく日本のマジシャンの方々から、「“Tarbell Course in Magic”全巻の翻訳はたいへんでしたね」と言われますが、私はたいへんなことだとはまったく感じていません。むしろそれはマジックについて書くことの喜びを感じさせる仕事でした。たぶんそれはプロリフィックな著者である、リチャード・カウフマン氏にも理解していただけることだと思います。今回の彼のテンヨークリエイターのインタビューという、たいへんな仕事を見させていただいて、そう思いました。

マジックについて書くことの喜びは、ハーラン・ターベル師のつぎの言葉にも感じ取ることができます。

私はこの瞬間にいて、そしてまた別の時にいます。人の人生はマジックであり、いまだ知られざるマジックです。学ぶことは多いのに、時はあまりにも速く過ぎ去ります。経験を積み重ね、熟達の域に達したと思えるとき、人はこの世を去ります。その無情に対する慰めがあるとすれば、偉大なる人々の残した財産が、つぎの時代へと受け継がれることです。

カウフマン氏とのインタビューにおいて、テンヨーでマジックを開発するのはチームワークによるものだと書きましたが、最後にそれを補足させていただきたいと思います。

マジックの製品とは、木になった果実です。クリエイターの存在とは、果実を成らす葉に相当します。そして葉を支えるのは枝です。それは(株)テンヨーの社員の皆さんです。そして枝をまとめるのは会社の役員の方々です。そして木には根があります。それが会社を作った山田昭氏をはじめ、多田野敏夫、田村嘉延、吉沢卓弥の方々でした。

そして木の成長には栄養が必要です。ダイ・バーノン師のマジックを見ることや、“Tarbell Course in Magic”を読むことは、まさに日本のマジック界に、そしてテンヨーのクリエイターにとって栄養となりました。そしてFISMが開催されるごとに、毎回クリエイターを出席させてくれたことも、山田氏のマジックにかける情熱の現れでした。

そして今回、リチャード・カウフマン氏が(株)テンヨーの製品についての集大成とも言える本を編纂されるということは、まるで‘Botania Flower Production’を見るがごとくです。多くの花が大輪で咲いた姿を見られるということ、そしてそれが後世に残されることは、マジックのクリエイターにとって、この上ない喜びであります。

## 当書の複製配布について

“Card Magic Magazine” No.30 において、2014 年 7 月 14 日づけの遺言として、私が pdf ファイルで発行したものについて、複製配布の許可期日を記しています。

その遺言に追加するものとして、当書についてつぎのようにさせていただきます。

この“マジシャンズストーリー”は、2020 年 1 月 1 日をもって、自由に複製し、無償配布することを許可いたします。

それまでは、複製して配布することはご遠慮ください。

2015 年 2 月 20 日

加藤 英夫

### マジシャンズストーリー

発 行 2015 年 2 月 20 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

---

MAGICIAN'S STORY

---